

鹿兒島県埋蔵文化財調査報告書 (13)

大隅地区埋蔵文化財分布調査概報

1980・2

鹿 児 島 県 教 育 委 員 会

序 文

大隅地区の埋蔵文化財分布調査は本年度（昭和54年度）で第5年次になります。

本年度までの調査で新しく発見された遺跡数は約200に達しました。また本年度は、一部の遺跡について確認調査（発掘）を実施し、遺跡の概要をとらえました。

これらの調査結果は、今後、大隅地域史の解明に役立つとともに、「新大隅開発構想」の具体化に伴って、開発と文化財保護との調和を図るための貴重な資料になると思います。

本報告は、昭和54年度の調査概報であります。この調査概報が、今後の文化財保護のために活用いただければ幸甚です。

発刊に当たり、調査に参加された地元の方々をはじめ、御協力をいただいた高山町教育委員会等並びに関係者各位に対し、深く感謝の意を表します。

昭和55年2月

鹿児島県教育委員会教育長

井之口 恒 雄

例 言

1. 本書は、昭和54年度に実施した、大隅地区埋蔵文化財分布調査の概報である。
2. 調査の組織は、調査の経過の中で記した。
3. 遺跡・遺物の実測図・写真等は、立神・中村が分担して行った。
4. 本書の執筆及び編集は、立神・中村が担当した。
5. 本書での市町村別管内の遺跡・遺物の項は、順不同である。
6. 本書での遺物番号は、遺跡別に記載した。
7. 土器の拓本は、完形土器では中心より左側、破片は断面の右側に配した。又口唇部については断面の上に配した。

本文目次

序文

例言

第1章 調査の経過

第2章 各市町管内の遺跡・遺物……………5

第1節 高山町管内の遺跡・遺物……………5

第2節 吾平町管内の遺跡・遺物……………12

第3節 有明町管内の遺跡・遺物……………16

第4節 末吉町管内の遺跡・遺物……………20

第5節 鹿屋市管内の遺跡・遺物……………24

あとがき

挿図目次

第1図	(付録) 鹿屋市遺跡地図	
第2図	高山町上ノ原地下式横穴・塚崎(西原)遺跡位置図……	6
第3図	高山町上ノ原地下式横穴周辺地形図……	7
第4図	高山町上ノ原地下式横穴……	8
第5図	上ノ原地下式横穴の副葬品……	10
第6図	塚崎(西原)遺跡出土遺跡実測図……	11
第7図	天神原地下式横穴位置図……	12
第8図	吾平町天神原地下式横穴周辺地形図……	13
第9図	吾平町天神原地下式横穴……	14
第10図	天神原地下式横穴出土鉄器……	15
第11図	有明町原田地下式横穴位置図……	16
第12図	有明町原田地下式横穴周辺地形図……	17
第13図	原田地下式横穴……	18
第14図	原田地下式横穴出土の刀子……	19
第15図	末吉町宮之迫遺跡位置図……	20
第16図	末吉町宮之迫遺跡地形図及トレンチ配置図……	21
第17図	宮之迫遺跡出土石斧実測図……	22
第18図	宮之迫遺跡出土器実測図及拓影……	23
第19図	鹿屋市鎮守ヶ迫地形図及トレンチ……	32
第20図	鎮守ヶ迫遺跡土器実測図……	33
第21図	鎮守ヶ迫遺跡土器実測図……	34
第22図	鎮守ヶ迫遺跡土器実測図及拓影……	35
第23図	鎮守ヶ迫遺跡石器実測図……	36

図版目次

- 図版1—① 上ノ原地下式横穴・玄室（羨道側より）
② 上ノ原地下式横穴・玄室（玄室奥壁より）
- 図版2 塚崎（西原）遺跡出土遺物
- 図版3—① 天神原地下式横穴・竪穴及羨道部閉塞状態
② 天神原地下式横穴・玄室（羨道側より）
- 図版4—① 原田地下式横穴玄室及軽石石棺
（蓋をとった状態）
② 原田地下式横穴軽石石棺底部
- 図版5—① 末吉町宮之迫遺跡・7-2トレンチ
土器出土状態
② 出土土器3
③ 出土土器2
- 図版6—① 鹿屋市本坊遺跡採集遺物
② 鹿屋市下西原遺跡遠景
- 図版7—① 鹿屋市山神遺跡近景
② 鹿屋市山神遺跡採集遺物
- 図版8—① 鹿屋市鎮守ヶ迫遺跡集石検出状態
② 鹿屋市鎮守ヶ迫遺跡土器出土状態
- 図版9 鎮守ヶ迫遺跡出土遺物

第1章 調査の経過

大隅地区は、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が多い地域である。特に畿内型高塚は、大隅地方の曾於郡、肝属郡を中心とした志布志湾沿岸部と肝属川流域に集中している。また南九州独特の地下式横穴が群集しながら所在し、古墳文化を築きあげている。これらの埋蔵文化財は、南九州の古代文化を解明するうえからも貴重である。近年は、遺跡の宝庫とされている大隅地方でも古墳をはじめ弥生期さらに縄文期の遺跡についても、近時進展している各種の開発事業により影響を受けやすい環境にあるといえよう。

大隅地区の文化財の分布調査は、昭和36年度の遺跡台帳作成の基礎的調査により数多くの遺跡が周知されている。しかしながら未調査の地域が多いため鹿兒島県教育委員会では、遺跡について基本である分布調査による埋蔵文化財包蔵地の確認の必要性から全国遺跡分布調査の一環として、昭和50年度以降、民間の協力を得ながら文化庁の補助を得て、大隅地域文化財調査計画に基づき、調査は悉皆調査を先行し確認調査をも実施した。昭和50年度より昭和53年度までの分布調査においては、数多くの弥生期の遺跡や縄文期の遺跡のほか古墳などの埋蔵文化財包蔵地の所在が明らかになり、確認調査も実施した。

本年度も文化庁の補助を得て、昭和50年度以降と同様の基本姿勢に基き大隅地区文化財分布調査を計画し、昭和54年4月9日から同年4月14日、昭和54年10月1日から昭和55年1月14日までと、さらに昭和55年2月7日から同年3月31日までの三次にわたり調査を実施した。

調査の組織

調査主体者 鹿兒島県教育委員会
調査責任者 文化課長 山下典夫
文化課長補佐 新 時弘
事務担当 文化課管理係長 中条 享 文化課主査 安藤幸次
調査担当 文化課主事 立神次郎 中村耕治

調査に当たっては、昨年と同様に文化庁全国遺跡分布調査要領に準拠し、埋蔵文化財を中心に分布調査及び確認調査をも実施した。特に分布調査においては、聞きとりや周知の遺跡においては再点検を実施するとともに悉皆調査を先行した。今回は三基の地下式横穴や遺跡地の一部について確認調査を実施した。

調査地域は、高山町・吾平町・有明町・末吉町・鹿屋市の各市町の一部地区である。前回の調査同様期間中は、各市町の情報を得ては、現地調査を行い古墳及び埋蔵文化財包蔵地の確認調査や発掘調査を行った。

調査に当たって、関係市町の教育委員会、地元の町田六男・実吉安尚・伊東正子・西之園みゆきの名氏の協力を受けた。記して感謝の意を表したい。

第2章 各市町管内の遺跡・遺物

本年度の調査地域は、高山町・吾平町・有明町・末吉町・鹿屋市の各市町の一部地区である。高山町の上ノ原地下式横穴群11号、塚崎西原遺跡、吾平町の天神原地下式横穴、有明町の原因地下式横穴、末吉町の久保地区、鹿屋市の鎮守ヶ迫遺跡については、確認調査及び発掘調査を実施した。各遺跡の遺物は鹿児島県教育委員会に保管されている。

第1節 高山町管内の遺跡・遺物

高山町は、大隅半島のほぼ中央（東南部）に位置し、東北側の一部は志布志湾に面した海岸線となり、南東側は山岳地帯で、甬与志岳を中心としたいわゆる国見山系となり内之浦、大根占町と接し、西側は肝属の沃野を隔てて吾平町、鹿屋市へと連なり、北部は蛇行性の強い肝属川によって串良町、東串良町と隣接している。

地形は山地・台地・沖積地とに大別され、山地と沖積地の占める割合が大きい。山地は南側に国見山（886.5m）や甬与志岳（967.9m）などの山岳があり、大隅半島南端を北東から南西に走る肝属山地の一部を形成している。台地は山地の北西側に所在し、本県特有の火山灰台地で、ほぼ平坦な畑作地帯であるが、浸食谷の発達により分断されている。沖積地は国見、高隈の連山より流れ込む大小河川により沖積平野が形成され、低湿な水田が立地し穀倉地帯となり、これらの地形はほぼ略三角形を呈している。

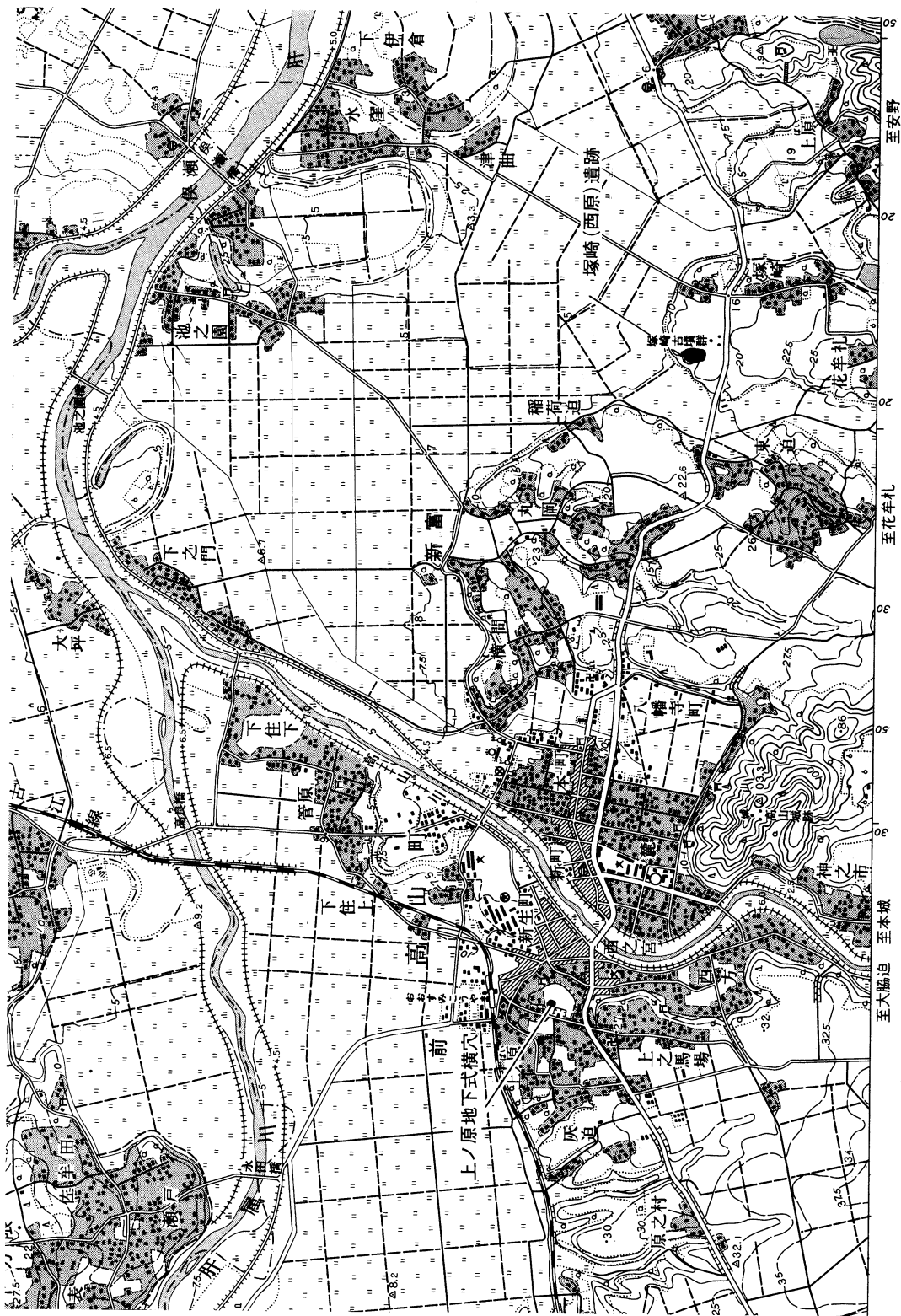
本年度は、前田、野崎地区の一部において確認調査及び発掘調査を実施した。特に野崎地区は塚崎台地を中心に弥生時代から古墳時代にかけて埋蔵文化財の遺跡地があり、弥生時代の住居址や国指定史跡塚崎古墳群などに見られる高塚古墳、地下式横穴群などが周知されている。

今回は、上ノ原地下式横穴群11号・塚崎（西原）遺跡について調査を実施した。各遺跡について概略を述べる。

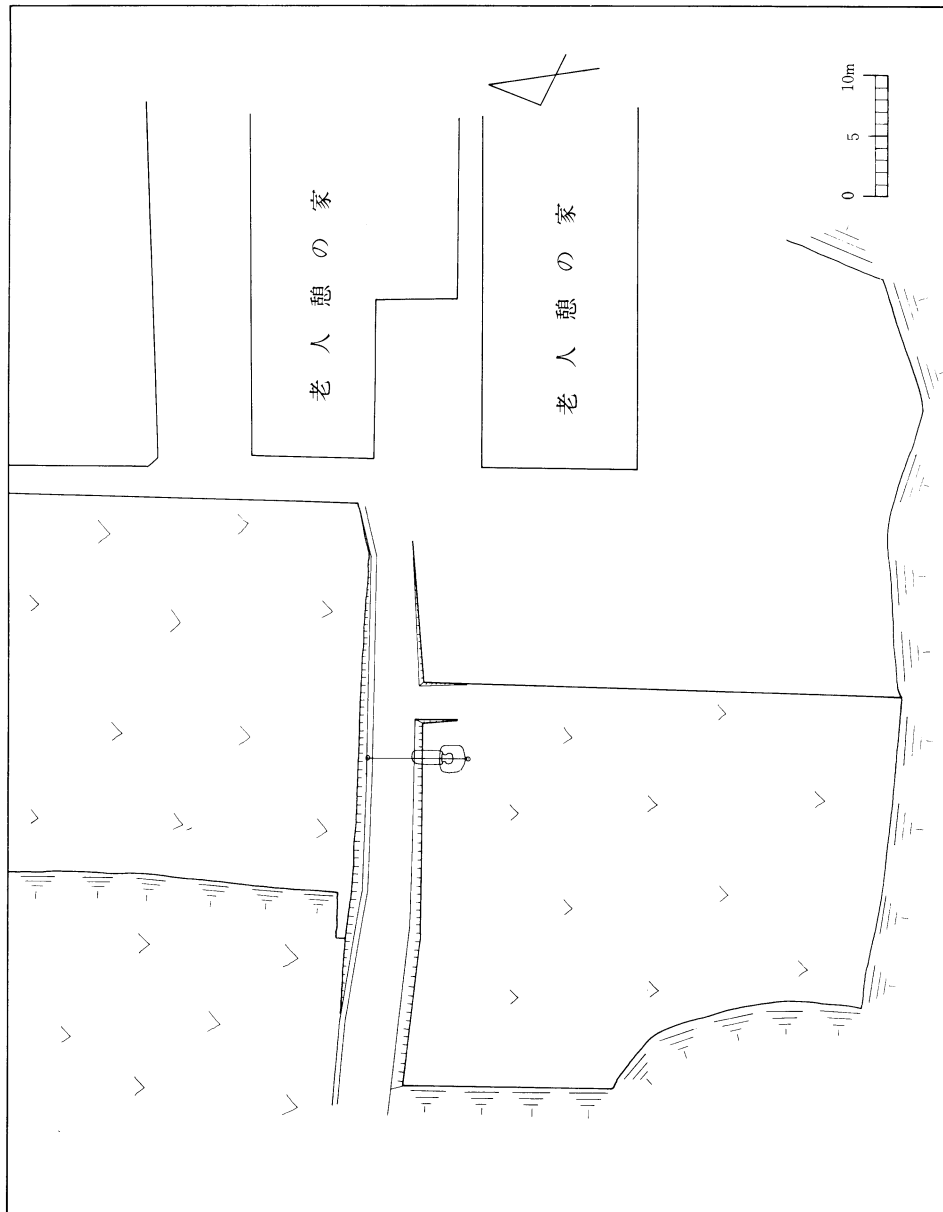
① 上ノ原地下式横穴群11号

高山町前田宮ノ上にあり、高山町老人福祉センター「いこいの家」の所在する標高約25mの台地上に位置する。同台地の東方約260mの所には肝属川の支流である高山川が流れ、北方約200mの所には国鉄古江線「おおすみ高山駅」があり、周辺地域は人家に取り囲まれている。また同台地を含む近辺の台地内には数多くの地下式横穴が群集をなし、今回発見の地下式横穴を含めて11基確認されている。現在、高山町公民館に保管してある軽石製組合せ石棺、貝製腕輪等の出土した地下式横穴も同台地内より発見されている。

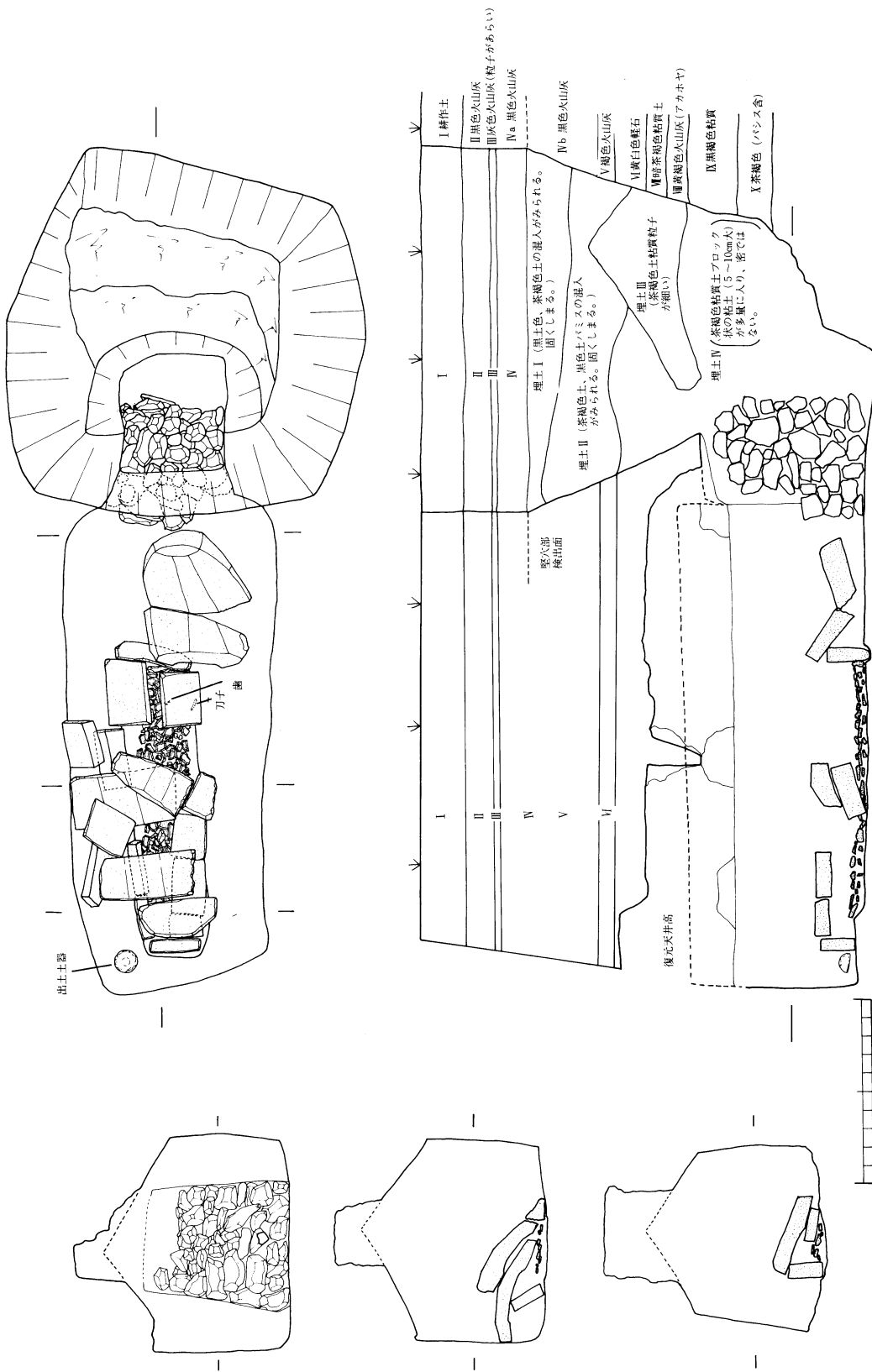
今回、発見された地下式横穴は、高山町で老人福祉センター「いこいの家」取り付け道路整備事業に伴い、取り付け道路排水工事整備事業を実施した。その結果、道路敷内工事中に



第2図 高山町上ノ原地下式横穴・塚崎(西原)遺跡位置図(2万5千分の1)



第3図 高山町上ノ原地下式横穴周辺地形図



第4図 高山町上ノ原地下式横穴

地下式横穴の玄室の一部が発見されたため発掘調査を実施した。

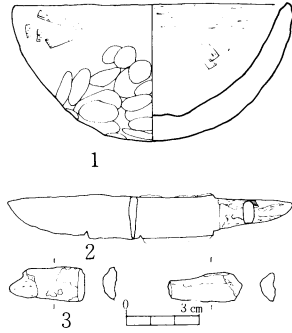
調査は、玄室の最奥部が新設道の工事施行により削平され、また竪穴部及び玄室の一部は寺田氏所有の畑地のため、その範囲の2 m × 5 mを対象とした。遺跡の確認時において、新設道ののり面に穴があいて居り、玄室内部を観察することが出来た。玄室内には、天井部の落盤が著しく玄室底面の状況は判明されなかった。そのため玄室内に落ちている粘土塊の土砂取り除き作業を実施した。その結果、軽石製組合せ石棺の確認がなされた。しかし、天井部の落盤のためか原形は留めず散乱していた。さらに羨道部の天井部も落盤が見られ、その部分より玄室内への土砂の流れ込みが見られた。羨道部は粘土塊により閉塞されており、竪穴部は玄室の南側に位置し、埋土が行なわれており地表面に標識らしいものは確認されない。

層位との関係について見ると、層位は、Ⅰ層、耕作土20cm、Ⅱ層、黒色火山灰土層15cm、Ⅲ層、灰色火山灰土層（粒子が荒い）5 cm、Ⅳ層、黒色火山灰土層（Ⅱ層とほぼ同質）65cm、Ⅴ層、褐色火山灰土層6 cm、Ⅵ層、（黄白色軽石層、Ⅶ層、暗茶褐色粘質土、Ⅷ層、黄褐色火山灰土（アカホヤ）Ⅸ層、黒褐色粘質土、Ⅹ層、茶褐色土、Ⅺ層茶褐色粘質土）Ⅻ層黄褐色土層（シラス質）となっている。竪穴部はⅣ層中位において確認され、その結果、Ⅰ層よりⅣ層上位にかけては、この地下式横穴が構築された以降の堆積であると考えられる。玄室はⅦ層～Ⅺ層にかけて構築されており粘土質の部分を利用したものと思われる。天井部はⅦ層にあたるが、Ⅵ層が軽石層のため境界部分から剥奪しやすく、そのほとんどが落盤している。また粘土質のため構築の折、土掘り具の痕跡が明瞭に残されている。羨道部の閉塞は構築の際に掘り出した粘土塊を利用したものと思われる。

この地下式横穴は、全長4.5 mである。竪穴部は2 m × 2 mのほぼ方形で、深さ1.8 mを測り、玄室及び竪穴部を掘った時の土で埋め戻してあった。羨道部の取り付けは妻入で竪穴側で60cm × 90cmのほぼ長方形、玄室側上辺で60cm、底辺で70cm、高さ80cmの台形を呈し、長さ40cmを測る。閉塞は10cm～30cm大の粘土塊を多く利用している。玄室は、長さ2.6 m、幅は1.0 mを測る。玄室内には、幅70cm、長さ1.8 m、高さ35 cmの軽石製石棺が納められる。石棺は蓋石5枚、側壁は左右5枚ずつ、小口は羨道よりで1枚、玄室奥部で2枚の計18枚の軽石板よりなる。外径は長さ1.8 m、幅30～40cmと小型である。石棺の底には軽石の削りくずが一面に敷きつめてあり、死床をなしている。遺体の残存は見られず、しかし歯の出土位置から考え、頭部を羨道より（南位）に置いてある。

遺物は、石棺内の頭部に近い部分より歯と思われるものが2本、石棺内より刀子が一点見られたのみである。また、石棺外、玄室の奥底面より直径11.4cm、高さ5.6cmの土師器の壺が検出された。

今回、調査を実施した地下式横穴は、上ノ原地下式横穴群の中においては11例目の発見であるが、記録調査が実施されたのは初めてであり、保存状態も良く、貴重な資料となった。時期的に見ると、玄室の形態が切妻の家型で平面プランが長方形をなし、羨道部が妻入りであることから古いタイプのものであると思われる。羨道部の閉塞は粘土塊を用い、玄室内には軽石製



第5図 上ノ原地下式横穴の副葬品

る鹿角柄の破片が2片見られる。第5図3は柄頭と思われるもので長さ3.1cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。第5図4は長さ3.0cm、幅1.2cm、長さ0.6cmを測る。

組合せ石棺を配置しており、当地方の地下式横穴の特徴を良く備えている。出土遺物は、歯2本、刀子1本、土師器の塊1個と少ないが、土師器の塊の出土により、この地下式横穴の年代を考察するうえで、重要な意味をもつものと思われる。この土師器（第5図1）は、口縁径11.4cm、器高（5.6cm）を測る。口縁部はやや内湾し、底部はやや平たい丸底を呈する。整形は、口縁部付近でハケによる調整、中位より底部にかけてはヘラにより研磨が施されている。焼成は良好で、胎土には石英、長石等を含んでいる。

刀子（第5図2）は全長11.8cm、茎長は3.2cm、茎幅1.1cm、厚さは背部で5.1mm、刃部側で3.4mm、刃渡8.6cm、区部の幅は1.75cm、背の厚さは3.1mmを測る。また、この刀子の着装に使用されたと思われる

② 塚崎（西原）遺跡

高山町野崎塚崎西原にあり、国指定史跡塚崎古墳群（遺跡地区番号74-84）の立地する標高約30mの舌状台地縁辺部の畑地に位置する。北側及び東西側は、肝属川により形成された沖積平野で水田地帯となり、その比高差は約20mである。これらの台地は通称塚崎台地と呼ばれ、高塚古墳をはじめ地下式横穴や遺物包蔵地を含めた周知の遺跡が広範囲に認められ弥生時代中期、成川式土器、土師器、須恵器などの遺物の破片が多量に散布している。塚崎古墳群は、前方後円墳4、円墳40の44基から構成され、その他に地下式横穴が周知されている。

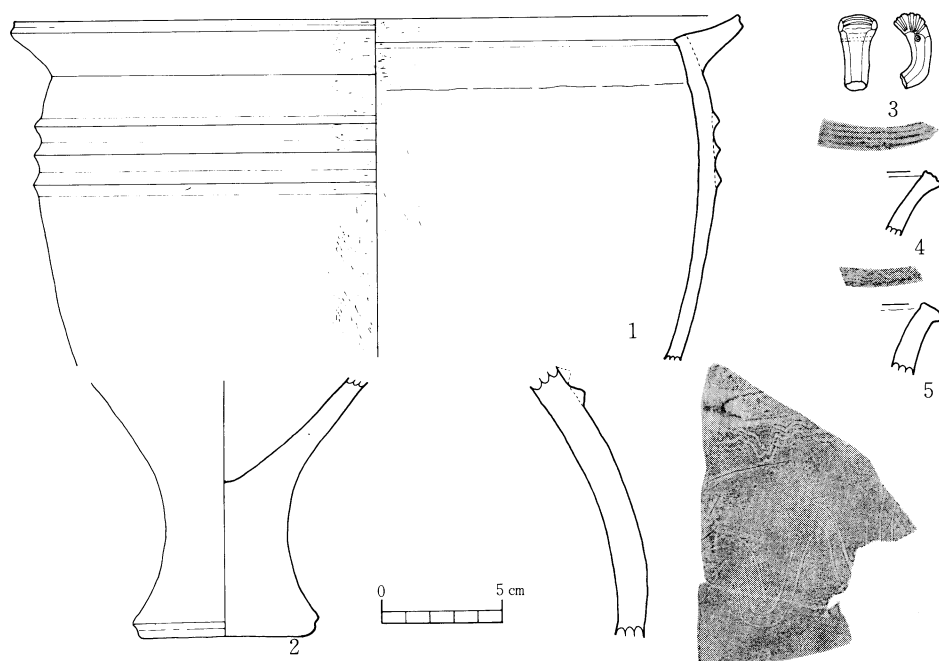
同遺跡は、昨年、町有地を対象に確認調査を実施した。今回は県道一内之浦一大根占線を基点とする町有地へ延びる農道敷について確認調査を実施した。

前回の確認調査の概要については、塚崎台地内の先端部に所在する町有地約4,000㎡が対象であり、調査対象地に10m×10mのグリッドを設定し、東西方向には10m間隔に、南北方向には20m間隔に2m×5mのトレンチを設定し確認調査を実施した。その結果、遺物包含層は削平されているトレンチも確認され、残存しても遺物包含層の層幅は浅く、残存している包含層最下部付近に住居址と考えられる遺構が確認された。基本的層位について見ると、第Ⅰ層、灰黒色火山灰土層（耕作土）、第Ⅱ層、黒色火山灰土層（弥生時代中期の遺物包含層）第Ⅲ層、黄色軽石層、第Ⅳ層、黄褐色土層、第Ⅴ層、黄褐色パミス層（アカホヤ層）、第Ⅵ

層、砂層、第Ⅶ層、黒褐色粘質土層、第Ⅷ層、黒褐色粘質土層となり、第Ⅱ層以外は、すべて無遺物層である。遺構・遺物については、D-8区とD-6区のトレンチにおいて、それぞれ住居址と考えられる遺構の検出がなされた。遺物は、弥生時代中期の土器が主で、甕の口縁部、胴部、底部や壺の口縁部、底部などの破片が多量に確認された。中には壺型土器の口縁部に櫛描波状文を施してあるものも見られる。また一点ではあるが土製勾玉も出土した。

今回の確認調査は、県道と町有地を結ぶ農道敷（幅6m×全長300m）について確認調査を実施した。調査は、2×3mのトレンチを基準に9ヶ所を認意に設定し調査を実施した。

その結果、県道寄りのトレンチにおいては、遺物包含層はすでに削平され、遺跡地の中心よりかなり離れている為か遺物包含層は残存しても土器細片の出土が認められる個所も見られた。1・2・7トレンチは、遺物包含層の残存が良く、弥生時代中期の遺物がかなり出土し、また性格は不明であるが遺構の検出がなされた。基本的層序については、前回の調査と同様で第Ⅱ層が黒色火山灰土層（弥生時代中期の遺物包含層）となり、以下各層は無遺物層である。遺物遺構については、長さ85cm×幅47cmの落ち込みが7トレンチにおいて検出されたが、作づけの関係で拡張が出来ず性格は不明である。その落ち込みの中には、全長47cm、最大幅25cmの砥石状の石とすり石状の石2個が認められた。遺物は、弥生時代中期の土器がほとんどで、甕の口縁部、胴部、底部、壺の頸部、底部などの破片が多量に見られ、碗の完形品の出土が見られた。詳細については本報告で述べる。



第6図 塚崎（西原）遺跡出土遺物実測図

第2節 吾平町管内の遺跡・遺物

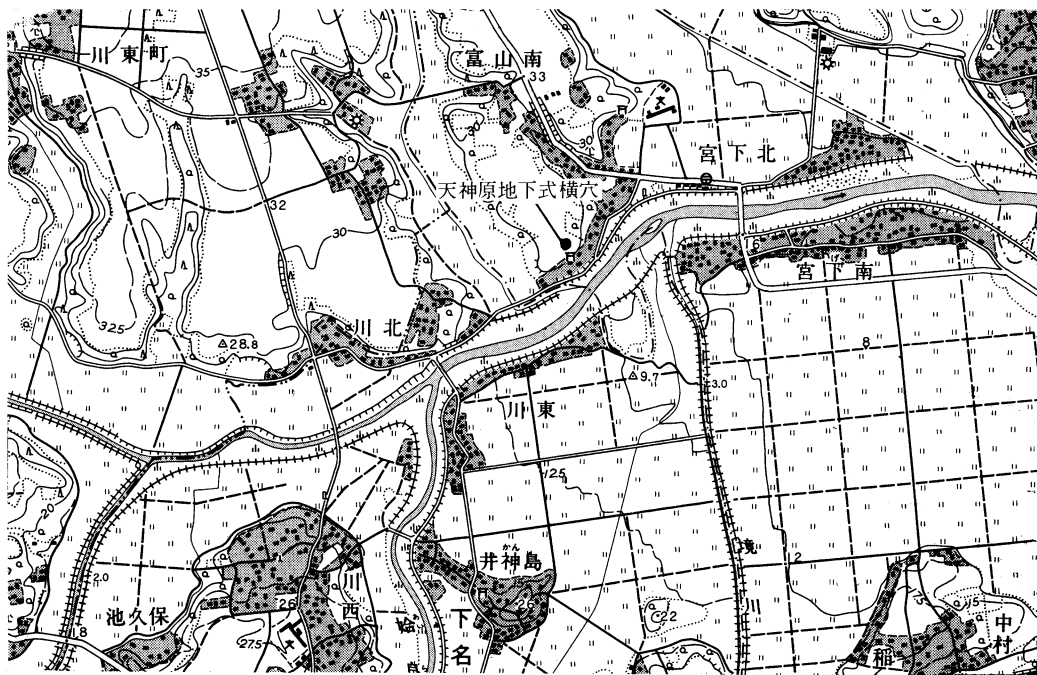
吾平町は、大隅半島のほぼ中央南部に位置し、北側は肝属郡串良町と鹿屋市、東側は肝属郡高山町、西側から南側にかけては肝属郡大根占町、北西側は鹿屋市とに隣接している。

地形は、山岳・台地・低地とに大別され、南部の大根占町・一部高山町との町境いに見られる山岳地帯と肝属川、始良川、苫野川、大始良川などの大小河川による浸食谷が多く立地し、南九州特有の火山灰台地が隋所に見られる。北部には、これらの河川により沖積平野が形成され、水田地帯となり肝属平野の一部をなし、穀倉地帯となっている。

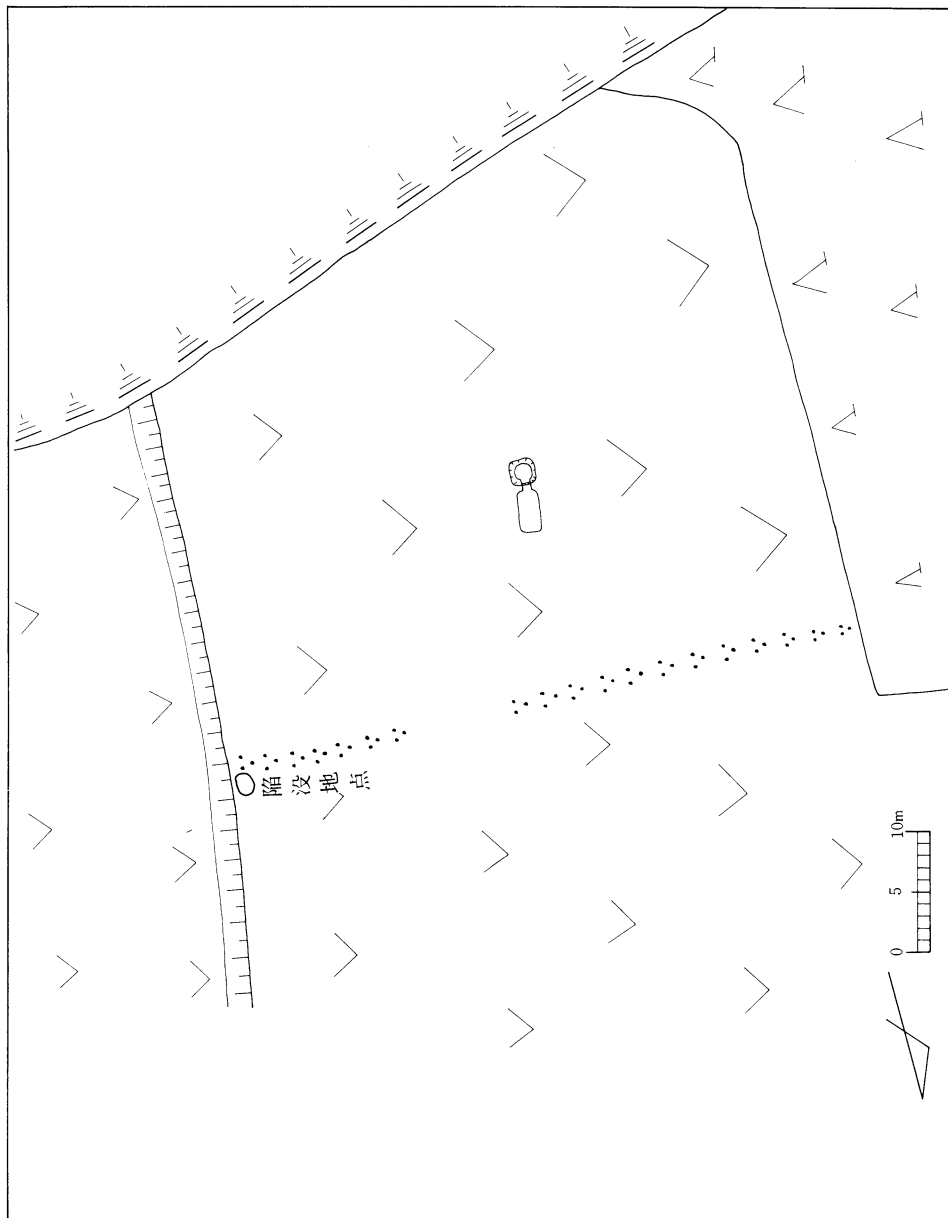
吾平町は昨年度の調査において、上名地区、麓地区、下名地区の全町において埋蔵文化財を主体に悉皆調査を実施し、その結果、上名地区、麓地区、下名地区ともに河川沿いの台地縁辺部の畑地を中心に広範囲に数多くの遺跡が確認された。本年度は、下名地区の川北に所在する天神原地下式横穴について調査を実施した。遺跡について概略を述べる。

③ 天神原地下式横穴

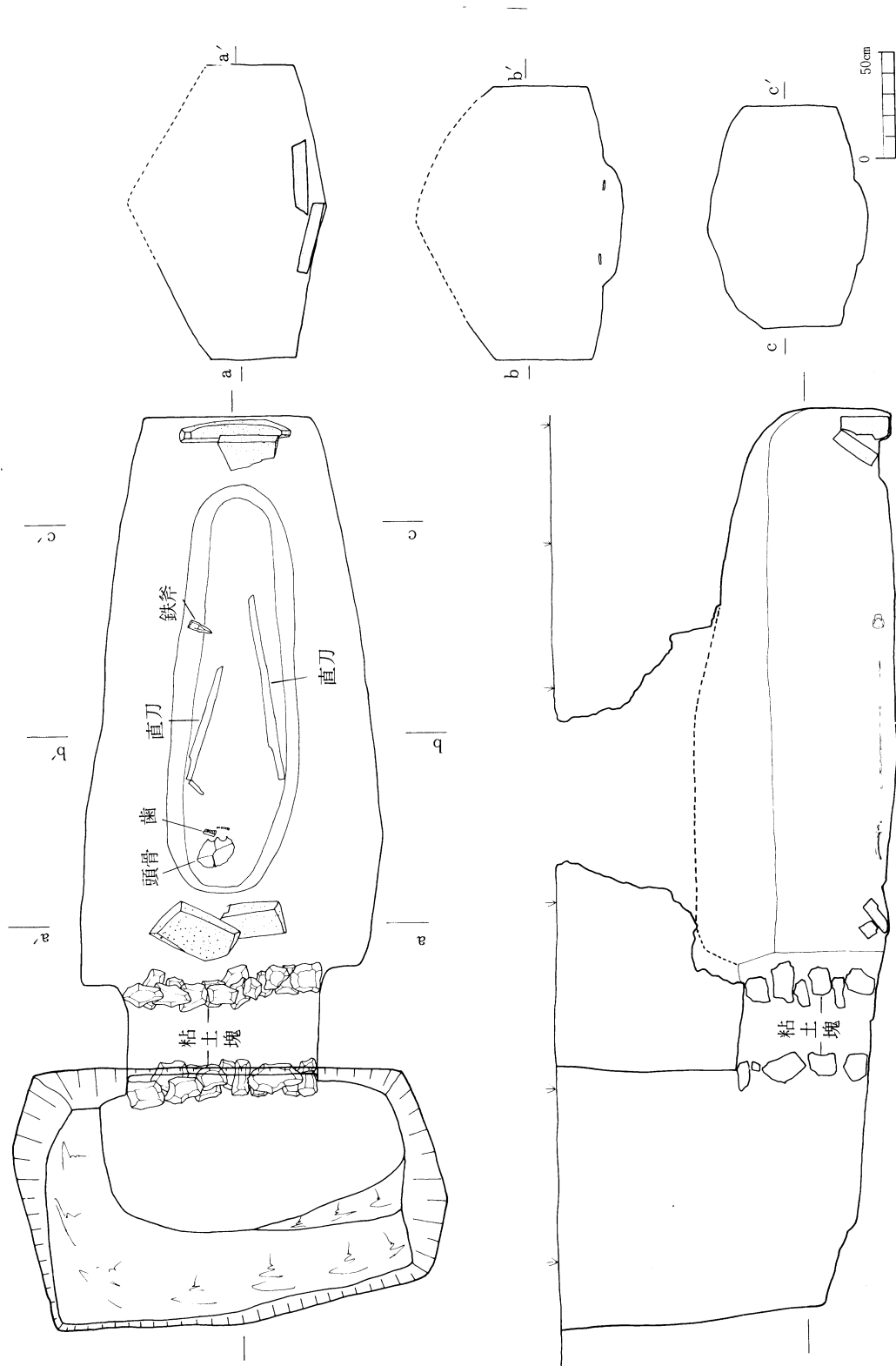
吾平町下名天神原にあり、標高約25mの舌状台地縁辺部上の畑地に位置する。同台地の南側沿いは、肝属川が西側方向に流れ、対岸沿いは茶園の集落地で、その周辺は肝属平野の一部をなす水田地帯が広がり、その比高差は約15mである。北東側から北側にかけては、県道高山停車場線が走り、その沿線は高山町宮下の集落地となっている。西側は浸食谷が北西側へ走り、水田地帯となっている。同遺跡地の北側沿いや東側沿いは、高山町との行政区画区域となる。



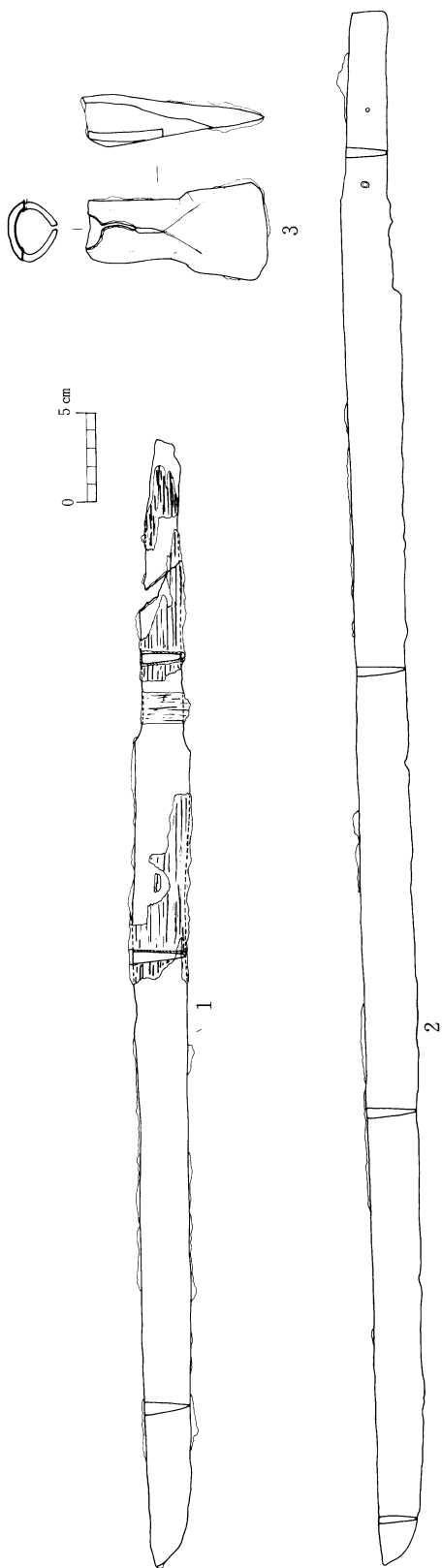
第7図 天神原地下式横穴位置図（2万5千分の1）



第8図 吾平町天神原地下式横穴周辺地形図



第9圖 吾平町天神原地下式横穴



第10図 天神原地下式横穴出土鉄器

今回、発見された地下式横穴は、田中正男氏所有の畑地において、耕作者の紺屋正文氏が大型トラクターにより耕作中、玄室の天井部が陥没し発見された。同台地は、以前にも地下式横穴が発見され、調査が行なわれている。（注1）

同地下式横穴は、紺屋氏により町教委へ連絡があり、調査を実施した結果、トラクターにより陥没した部分は、玄室の羨道部側の天井部であった。

調査は、陥没部分が狭く作業が困難なため、竪穴部分を開口し、羨道部より玄室内に落ち込んでいる土砂の排土作業を実施しながら調査を進めた。その結果、第8図でわかるように、長軸がほぼ南北方向を示し、全長は4.3mで、竪穴部は南側に位置し、2.1m×1.2mのほぼ長方形、深さ1.5mを測る。羨道部は幅0.9m、高さ0.6m、長さ0.5mを測り、玄室への取り付けは妻入りである。羨道部は10cm～20cm大の粘土塊により閉塞してある。玄室は幅0.8m～1.3m長さ2.6m、高さ0.6m～0.9mを測る。玄室内には羨道よりと玄室最奥部に、それぞれ2枚ずつの軽石板を配置している。最奥部一枚には赤色顔料が塗布してある。玄室中央には幅0.6m、長さ2.0m、深さ6cmの死床を掘り込み、人骨は羨道寄りに頭骨の一部が残存しているのみである。頭骨の状態から仰臥の姿勢で、頭部を南に向けて埋葬されていたものと思われる。

副葬品は直刀が二本、鉄斧が一本見られ直刀は人骨の左右脇に一本ずつ、鉄斧は左側脇に副葬されていた。第10図2は直刀で全長87.6cm、茎長は16cm、茎幅は2.2cm～2.8cm、厚さは背部0.6cm、刃部側で0.2cm、

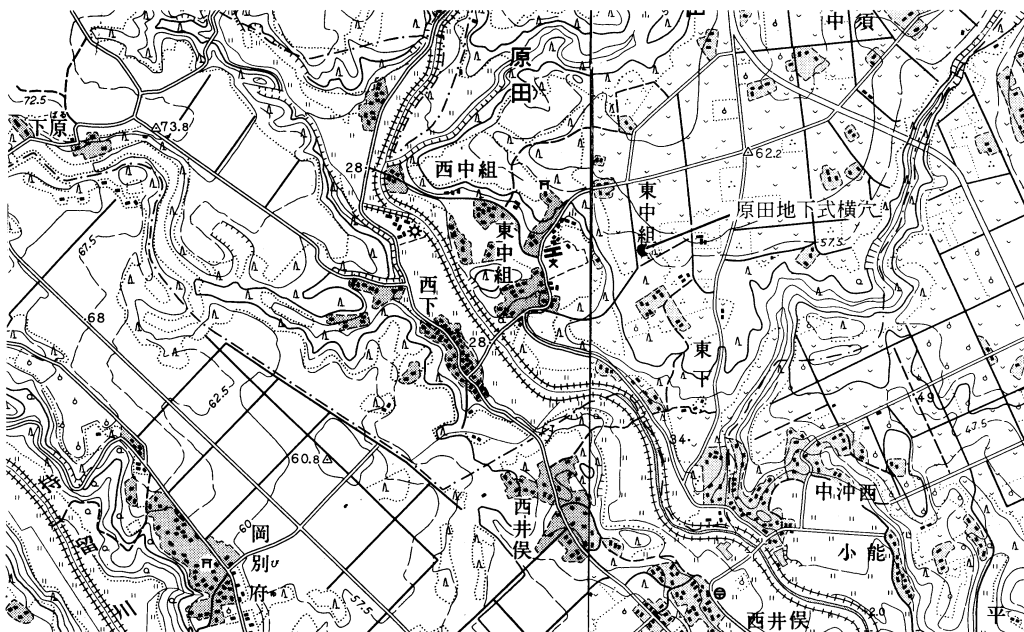
目釘穴2個を有する。刃渡は71.6cm, 刃区を有し, 区部での幅は, 3.4cm, 中央部で3cm, 切先部で2.5cm, 背の厚さは0.6cmを測る。第10図1は, 直刀で全長64.6cm, 茎長17.1cm, 茎幅1.5cm~2.5cm, 厚さは背部で0.6cm, 刃部側で0.3cm, 茎には木柄の残痕が付着している。刃渡は45.9cm, 刃区を有し, 区部での幅は3.3cmで, 切先部で2.5cm, 背の厚さは0.7cmを測る。一部に鞘の木質の残痕が付着している。第10図3は鉄斧で全長10.3cm, 刃部幅5.5cm, 袋部内径2.5cm×2.0cmで半円形状を呈する。袋のつくりはよく, 接合部はほぼ密着している。

同地下式横穴の玄室の形態は, 切り妻の家形に近い状態であるが天井部がシャープでなくやや丸味を帯びている。また平面プランが長方形, 羨道部の取り付けが妻入りであることから古いタイプの地下式横穴と思われる。

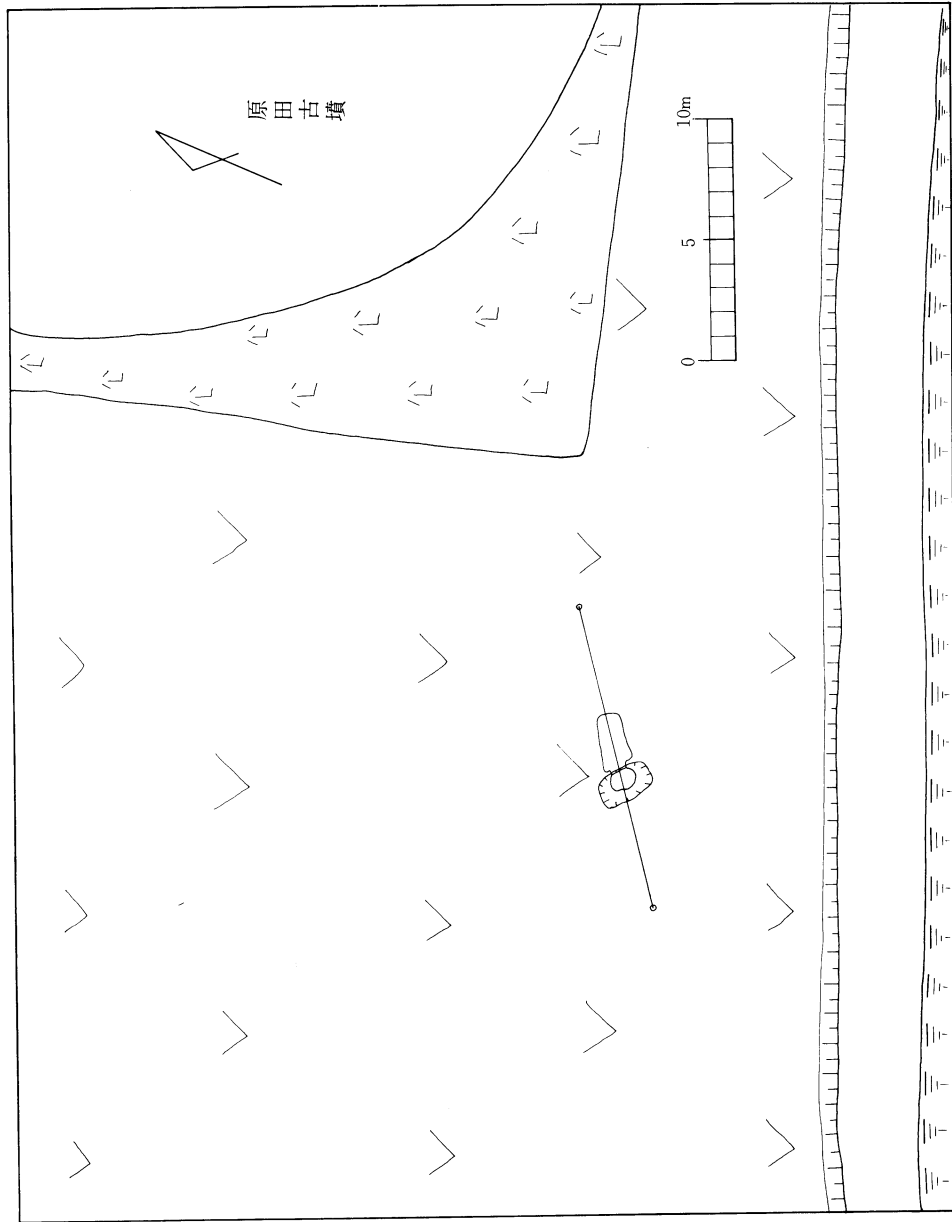
第3節 有明町管内の遺跡・遺物

有明町は曾於郡の南部に位置し, 北側は大隅町および松山町, 東側は志布志町, 西側および南側は大崎町と隣接し, 東南側は志布志湾に面している。

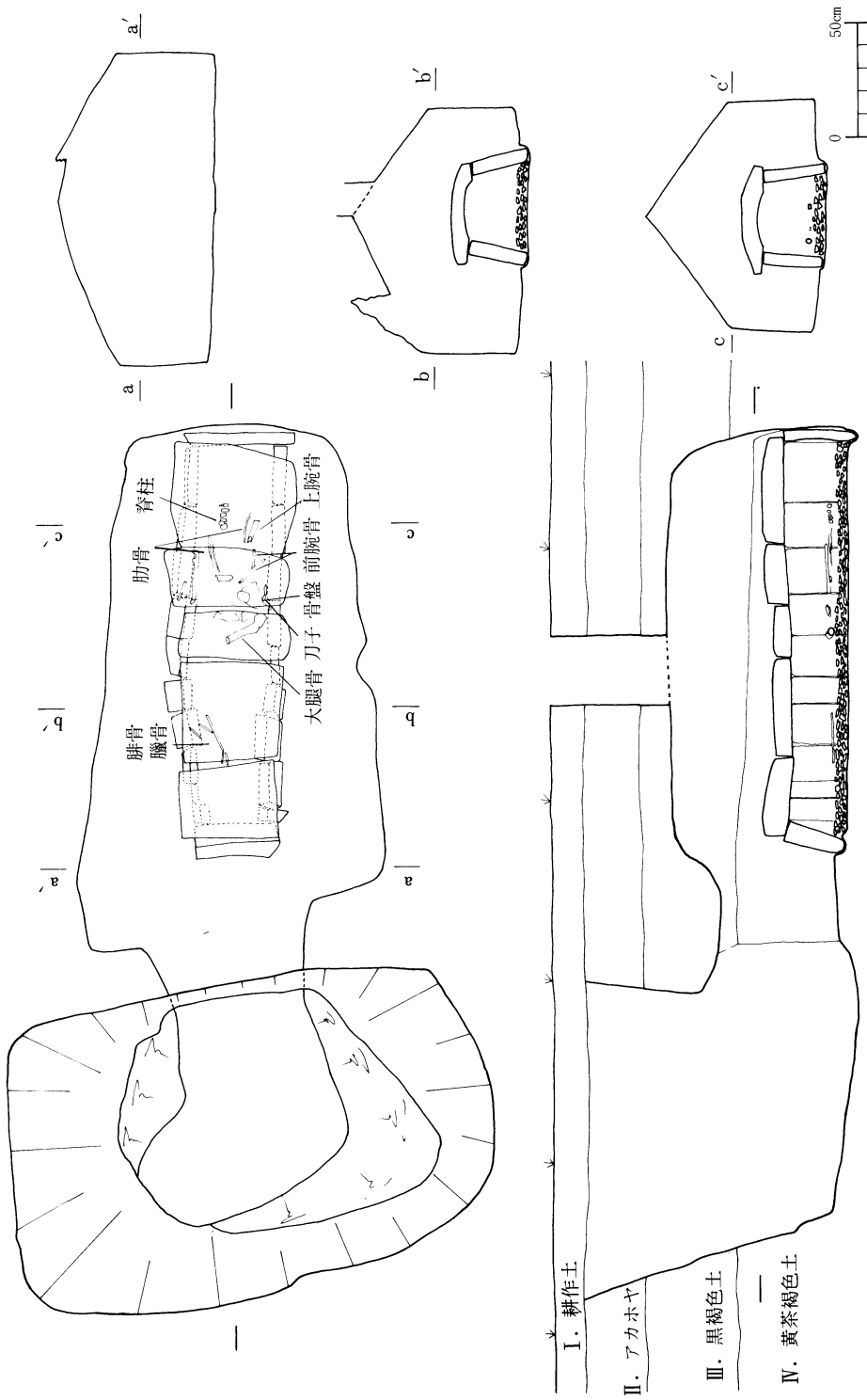
地形は, 山地, 台地, 低地に大別され, 北部は霧岳・中央部は野井倉周辺を中心とした山地北部の伊崎田から西部野外にかけて丘陵が連なり, 菱田川, 田原川を中心とする大小河川により浸食谷が多くみられる黒色火山灰台地, 菱田川, 田原川, 高下谷川, 本村川などの河川に浸食された河岸段丘に水田が立地し, 町のほぼ中央部を縦断する菱田川により沖積平野が形成され, 水田地帯となっている。さらに菱田川と安楽川とに取り囲まれた台地上に広大な野井倉開田となり有明町の穀倉地帯となっている。



第11図 有明町原田地下式横穴位置図 (2万5千分の1)



第12図 有明町原田地下式横穴周辺地形図



第13図 原田地下式横穴

本年度、調査を実施した原田地区は、全域の畑地について土地改良整備事業がほぼ完了しており、同町原田大塚には、大塚A古墳、大塚B古墳、原田古墳などの高塚古墳が現存している。今回、発見された地下式横穴について概略を述べる。

④ 原田地下式横穴

有明町原田大塚にあり、標高約57.5mの台地縁辺部の畑地に位置し、北側は町道馬場東中組線がほぼ東西に走り、西側眼下は田原川が流れ、沿岸は水田地帯となり、原田小学校が所在し、周辺地域は東中組の集落地となっている。同遺跡地内には原田古墳（径40m・高さ15m）があり、同古墳より北側約200mの所に中本製茶工場が所在し、周辺地域は畑作地帯となり、町道の交差点内には、原田三角点があり、標高62.2mを数える。

今回、調査を実施した地下式横穴は、県開発公社社有地の畑地で、耕作者の原田氏が貯蔵用のイモ穴を掘っている最中に穴が開き、中を観察したら空洞となり軽石が確認されたため有明町教育委員会へ連絡があり地下式横穴と判明し、調査の運びとなった。

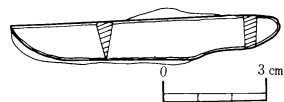
同地下式横穴は、原田古墳の南西に位置し、墳裾から約22mの所にあり、主軸が北東～南西の方向を示す。玄室は原田古墳の方に向けてあり、全長は3.9mを測る。竪穴部は南西に位置し、2.1m×1.4mの長方形で深さ1.1mで、同畑地は土地改良整備事業により上部削平のためか浅い。羨道部は幅0.6m、高さ0.6m、長さ0.5mを測り、玄室への取り付けは妻入りである。羨道部の閉塞の痕跡は認められないが玄室内への流入土が極めて少ないことを考えると板状のものによる閉塞が行なわれていたものと想定される。玄室内には幅0.5m、長さ1.4m、高さ0.35mの軽石製組合石棺が納められている。石棺は蓋石が5枚、側壁は羨道に向って右側が10枚、左側が9枚、小口はそれぞれ1枚ずつの計26枚の軽石板を使用している。石棺の底には軽石の削り屑が多量に敷き詰められ、死床面をなしている。

人骨は、保存状態が悪く非常に脆かったが、石棺内の羨道部より臑骨・腓骨、中央部に大腿骨、骨盤、肋骨、前腕骨、奥壁より上腕骨、脊柱等が認められる。埋葬は人骨の状態からみて伸展葬と考えられる。

出土遺物は刀子が1点だけである。刀子（第14図）は、全長7.9cm、茎長2.6cm、茎幅は背部で0.03cm、刃部で0.02cm、刃渡5cmを測り、刃区を有する。背幅は0.03cmを測り、やや小さな刀子である。

この地下式横穴は、玄室の形態が切妻の家型をなし、平面プランが長方形で羨道の取り付けが妻入りであることから見て、いわゆる古いタイプの地下式横穴と思われる。また軽石製組合石棺を有していることは当地方の地下式横穴の特徴である。同地下式横穴は、南東方向で国道220号線寄りの畑地に所在している大崎町飯隈古墳群中の地下式横穴と共に、現在では東限にあたると思われる。

（注1）。鹿児島県教育委員会『鹿児島県文化財報告書第4集』



第14図 原田地下式横穴出土の刀子 1957・3

第4節 末吉町管内の遺跡・遺物

末吉町は曾於郡の北部に位置し、北東側では宮崎県との県境である都城市と隣接し、北西側は財部町、西側は大隅町、南側は松山町、東南側は志布志町と相接している。

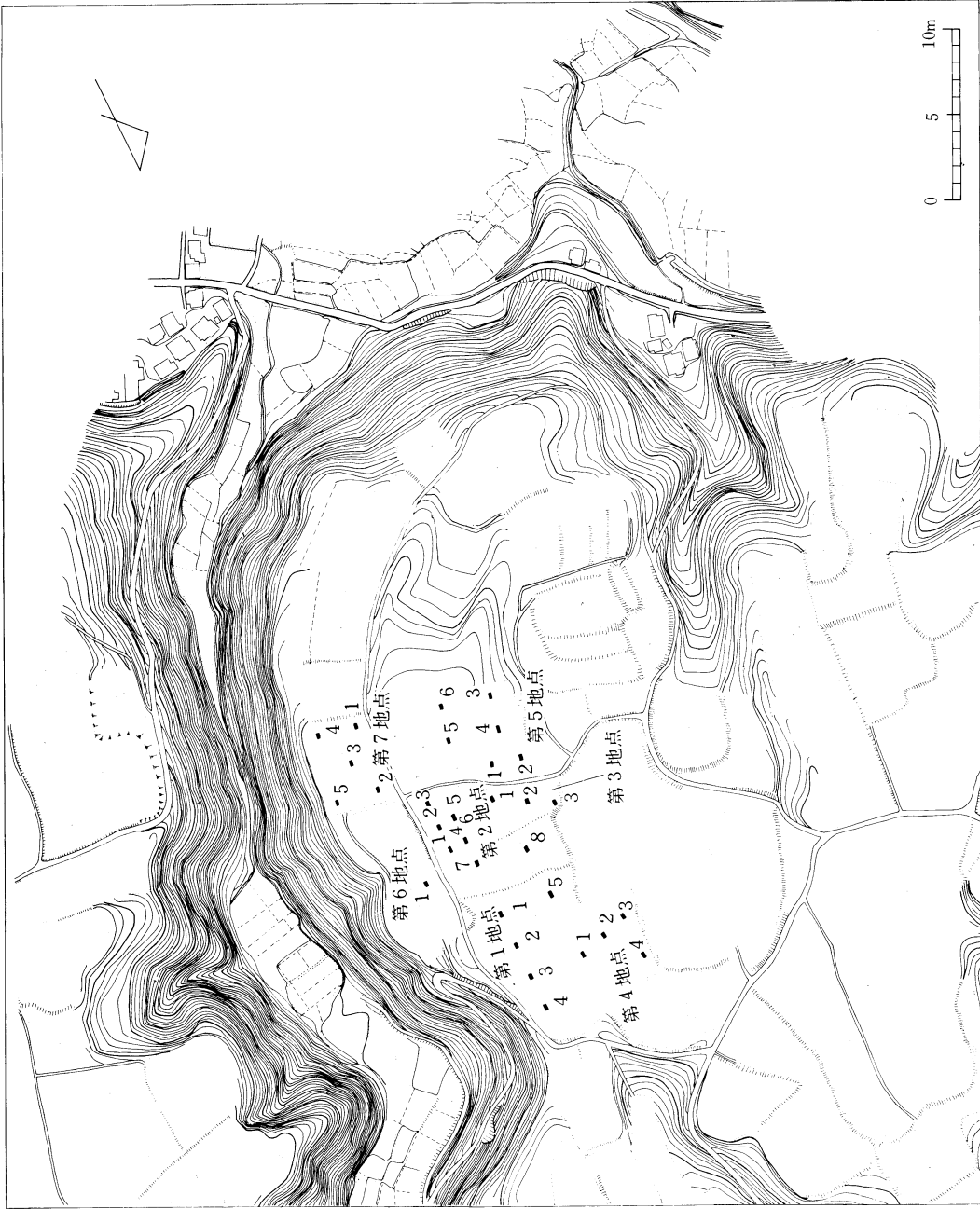
地形は山岳・台地・低地とに別れ、南之郷付近を中心とした山岳地帯と南九州特有の火山灰土壌のため、大淀川、菱田川、村山川、獅子込川、久保川など大小河川により浸食谷が発達し、大部分が分断されたシラス台地となり、大部分を示めており、大小河川流域は浸食により出来た低地に大小の水田地帯とで構成されている。

本年度、調査は南之郷久保地区を中心に確認調査を実施した。今回、調査を実施した地区は、台地縁辺部の微傾斜の畑地に縄文式土器の散布が広範囲に見られ、遺物包含層への影響が考えられたために調査を実施した。以下遺跡の概要について述べる。

⑤ 宮之迫遺跡

末吉町南之郷宮之迫にあり、標高約240～248 mの舌状台地の畑地に位置する。同台地の南側眼下は、県道南之郷—大隅線がほぼ南北に走り、大淀川が西方向に蛇行しながら流れ、沿岸是水田地帯となり、その比高差は約47～55 mである。東側眼下は、浸食谷が発達し、わずかな所に狭小な水田が立地している。東南側は、県道沿いに南之郷中学校が所在し、周辺地域は下柿木の集落地となる。西側眼下は、大淀川が流れ、県道沿いに南之郷農協があり、その周辺地域には富田の集落が点在している。同遺跡地は、台地縁辺部寄りに微傾斜を呈した畑地が中心で、中には階段状に開墾された畑地も見られる。



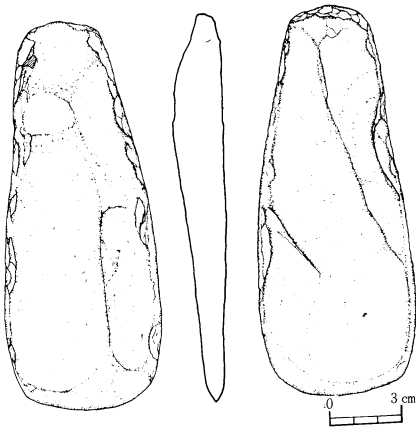


第16図 末吉町宮之迫遺跡地形図及トレンチ配置図

今回は、遺物散布の見られた畑地で、東側台地縁辺部寄りの畑地を中心に、2 m × 3 m のトレンチを基準に約30ヶ所を任意に設定し調査を実施した。その結果、縄文時代早期及び中期の遺物包含層の確認がなされた。その概略は、次のとおりである。1地点の2・3トレンチの第Ⅶ層最下部土層中より、縄文時代早期の土器で胴部に撚糸文が施されている土器破片や底部で平底の破片のみの出土が見られた。第2・第5・第7地点では、第Ⅲ層土層中より縄文時代中期の土器や石器が見られ、第2地点1・3・4・5・8トレンチ、第5地点1・2・3トレンチ、第7地点2・3トレンチの各トレンチの第Ⅲ層より土器破片が多量に出土し、特に第5・第7地点においては、完形品及び大きい土器破片が多量に認められ、第5地点1トレンチより磨製石斧の出土が見られる。

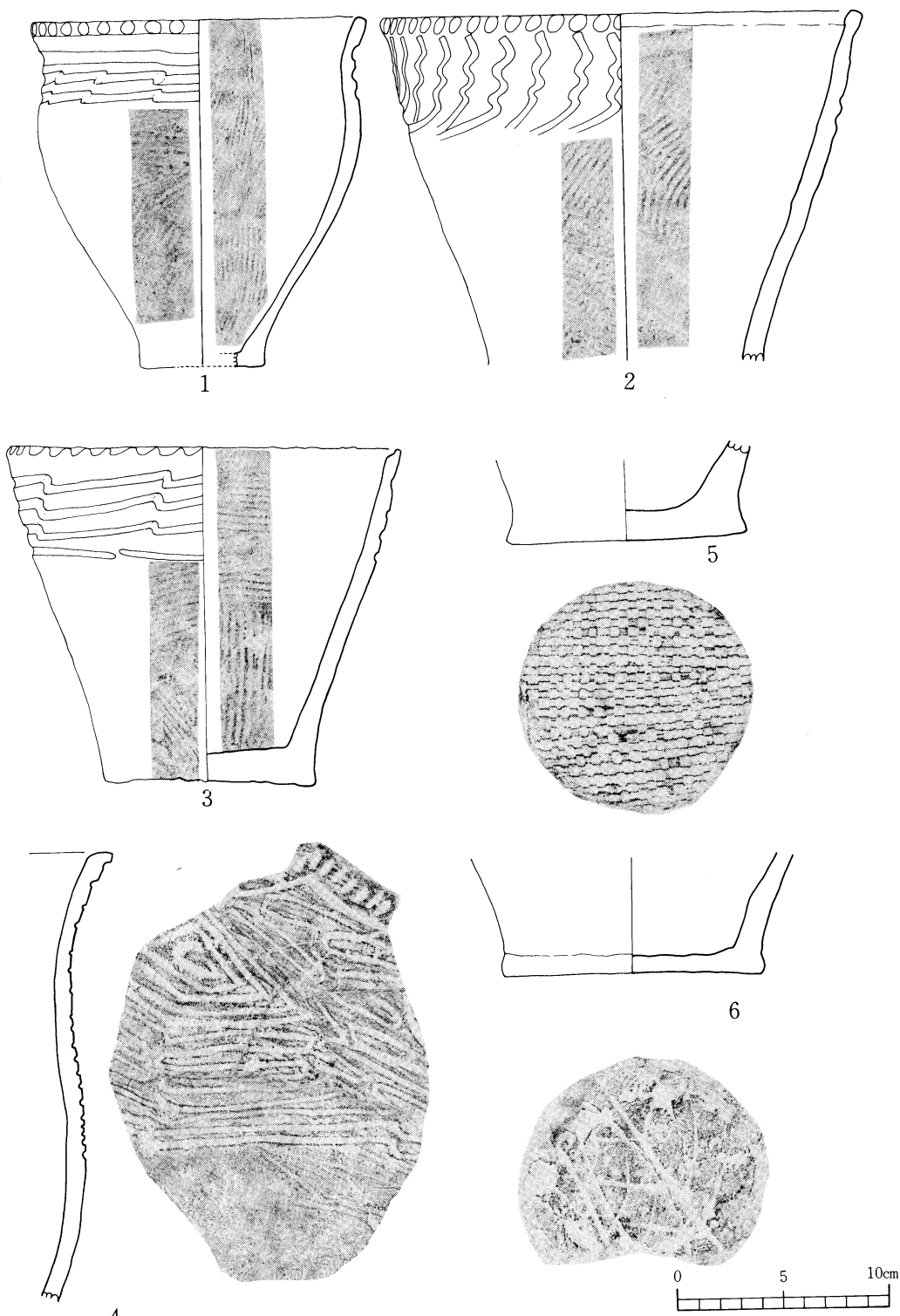
基本的土層については、第Ⅰ層、黒褐色土層（耕作土）、第Ⅱ層、黒褐色土層（白斑パミスを含む）、第Ⅲ層、黄褐色土層（やや粒子の荒いパミスを含む）縄文時代中期の遺物包含層第Ⅳ層、茶褐色硬質土層、第Ⅴ層、暗茶褐色硬質土層、第Ⅵ層、橙褐色火山灰土層（アカホヤ層）第Ⅶ層、黒褐色硬質土層、（パミスを含む）縄文時代早期遺物包含層、第Ⅷ層、黒褐色粘質土層となっている。

出土遺物は多量に見られ、土器の中で特徴的なものを取り上げると**第18図**のようなものが見られる。**1**は復元口縁径15.8cm、器高16.3cmを測る。地文は表裏共に貝殻腹縁による条痕が施される。口唇部には刻目をもち、胴部上位に沈線文を一条と平行沈線文を二条めぐらしている。**2**は復元口縁径22.8cmを測る。地文は表裏ともに貝殻腹縁による条痕が施されている。口唇部には刻目をもち、口縁直下から胴部上位にかけては、S字状沈線文が縦位に施文されている。**3**は完形土器で口縁径18.7cm、器高15.8cmを測る。地文は表裏共に貝殻腹縁による条痕が施されているが、沈線文の部分については摩り消してある。口唇部には刻目をもち、胴部上位に三条の平行沈線とその下位に一条の沈線が巡らしてある。**4**は表裏ともに貝殻条痕が施されてあるが浅く明瞭でない。また文様の部分については摩り消されている。口縁部は波状を呈し、口縁直下にヘラにより鋭い刻目が施される。その下位より胴部中位までヘラによる鋭い沈線で幾何学文様が描かれている。**5・6**は底部である。**5**は底部径11.4cmを測りきめの細い、明瞭な網代底である。**6**は底部径12.2cmを測り、木の葉を2枚使用した木の葉底である。以上の土器は、縄文時代中期の岩崎式土器に比定できよう。



第17図 宮之迫遺跡出土石斧実測図

第17図 は、第5地点トレンチの第Ⅲ層より出土し、全長16.2cm最大幅6.5cm、最大厚2.1cmを測りわりと扁平の磨製石斧である。



第18图 宮之迫遺跡出土土器実測図及拓影

第5節 鹿屋市管内の遺跡・遺物

鹿屋市は、大隅半島の中央部にあり、北側は輝北町、南側は吾平町及び大根占町、東側は串良町及び高山町、北西側は垂水市、北東側は大隅町の各町と隣接し、南西側は錦江湾に面した海岸線をもっている。

地形は、大窺柄山、高隈山、御岳、横尾岳、陣ノ岡を中心とする山岳、高隈山地に源を発する肝属川により二分される台地（北側笠野原台地一帯・南側鹿屋航空基地から下掘、萩塚にかけての台地）、肝属川、高須川、大始良川を中心とする大小河川により浸食された河川流域に立地する水田地帯とに分けられる。山岳、台地が大部分の面積を占め、沖積平野にめぐまれず河川流域にわずかな狭小な水田地帯が存在する。

本年度調査は、同市において埋蔵文化財を主体に悉皆調査を実施し、特に大小河川沿いの台地縁辺部の畑地を中心に数多くの遺跡が確認された。昭和36年度以来、縄文時代の遺跡地は未周知であったが、今回の調査において大始良地区をはじめ数ヶ所の遺跡が確認された。さらに同市南町鎮守ヶ迫遺跡については確認調査と一部発掘調査を実施した。その結果、成川式土器、弥生式土器、縄文式土器（中期・後期）などを主体に石包丁、磨製石斧、石ヒなどの石器も出土した。各遺跡について概略を述べる。

① 本坊遺跡

鹿屋市南町本坊・六ノ里にあり、標高約35～37mの台地縁辺部の畑地に位置する。遺跡地の北側沿いは県道小浜―高山線が走り、北側から南側にかけては狭長な水田地帯となり、その比高差は約17mである。水田地帯の中央部を大始良川の支流である西目川が縦断して流れ川の中央部が吾平町との行政区画区域となっている。同台地は、ほとんど平坦地であるが縁辺部寄りの畑地は微高地となり、遺物の散布も顕著で大きい破片も数多く見られ、一部遺物包含層への影響も考えられる。遺物は、成川式土器、須恵器、弥生式土器、縄文式土器（蓆目庄痕文土器、市来式土器）などの土器片が広範囲に見られ、石器として磨製石斧も認められる。

② 島元遺跡

鹿屋市南町島元にあり、標高約45mの台地縁辺部の畑地に位置する。遺跡地の北側は、標高約73.8mの略三角形を呈した大塚山があり、その周辺の一部に人家が散在している。同台地の東側から南側にかけては狭長な水田地帯となり、その比高差は約18mである。その水田地帯の中央部を西目川が南北に流れ、吾平町との行政区画区域となっている。同遺跡地の北側約800mには本坊遺跡がある。遺物は、成川式土器、弥生式土器などの土器破片が見られるが少量である。

③ 上原遺跡

鹿屋市南町上原にあり、標高約35mの舌状台地上の畑地に位置する。同台地周辺は、水田地帯に取り囲まれ、その比高差は約20mである。水田地帯は、大始良川と西目川が蛇行しながら流れ、遺跡地をとり囲んだ地形となっている。南側は、県道小浜一高山線が東西に走り、沿線には木材センター大隅市場がある。同遺跡地は独立した台地上の畑地で遺物の散布が広範囲に見られ、須恵器、成川式土器、弥生式土器、縄文式土器（後期）の土器破片が認められる。

④ 松尾遺跡

鹿屋市獅子目町松尾にあり、標高約50mの台地縁辺部の畑地に位置する。同台地の北側は、県道小浜一高山線が東西に走り、その沿岸は狭長な水田地帯となり大始良川が流れる。その比高差は約25mである。南側は市道神田原坂線が横断し、市道とに取り囲まれた畑地が遺跡地となっている。遺物は、青磁、須恵器、成川式土器、弥生式土器（中期）などの土器破片が著しく広範囲に見られる。

⑤ 岡ノ前遺跡

鹿屋市獅子目町岡ノ前、小玉塚にあり、標高約55mの台地縁辺部の畑地に位置する。同台地の北側は、市道神田原坂線が走り、その沿線は水田地帯となっており、その比高差は約30mである。遺跡地の東側沿いは、市道神田原坂線から延びる市道寺迫獅子目線が南北に走っている。北西側は、水田を隔てて約200mの所に史蹟大始良城跡がある。同遺跡地は、浸食谷により二分され、台地縁辺部寄りの畑地に遺物散布が著しく土師器、成川式土器などの破片が見られる。

⑥ 飯隈遺跡

鹿屋市飯隈町飯隈・牧にあり、標高約40mの台地縁辺部の畑地に位置する。同台地の北側眼下は、北から南西にかけて浸食谷となり水田が立地し、市道永野田玉山線が走っている。同遺跡の東側沿いは、飯隈の集落となり納骨堂が建立している。南側沿いは、池ノ迫上遺跡と相接し、飯隈公民館前の道路が東西に走っている。遺物は、須恵器、成川式土器、弥生式土器などの破片が多量に見られ、特に、飯隈公民館前の畑地のイモ穴周辺からは、弥生式土器の大小破片が数多く認められた。

⑦ 小牧遺跡

鹿屋市萩塚町小牧にあり、標高約40mの台地縁辺部の畑地に位置する。同台地の東側から南側眼下にかけては、大始良川が蛇行しながら流れ、その沿岸は水田地帯となっている。遺跡地の北側、南側、西側沿いは、萩塚の集落が密集している。遺物の散布は少ないが弥生式

土器の破片が見られる。

⑧ 菖蒲遺跡

鹿屋市飯隈町菖蒲にあり、標高30～35mの台地縁辺部寄りの畑地に位置する。同台地の東側眼下は、水田地帯となり大始良川が流れ、台地沿いを市道飯隈山崎線が縦断している。南側は水田を隔てて飯隈遺跡の所在する台地となる。西側は市道飯隈瀬筒線がほぼ南北方向に走り、市道永野田一玉山線と結ばれる。遺物は、成川式土器、縄文式土器（晩期）などの土器破片が見られ、特に縄文式土器破片は、遺跡地でいちばん高い所にあり、一部遺物包含層への影響が考えられる。

⑨ 暮小迫遺跡

鹿屋市田淵町暮小迫、井料崎にあり、標高約50mの台地縁辺部寄りの畑地に位置する。同台地南側眼下は、大始良川が東西方向に流れ、沿岸地域に狭長な水田地帯が立地し、さらに獅子目町の台地寄りを県道小浜一高山線が走っている。北東側は、東側水田付近より延びる浸食谷が市道大始良中学校線付近へと続き、北西側約600mの所には、市立大始良中学校が所在し、学校周辺地域は、田淵町の中心街となっている。西側は、県道田淵一田崎線を基点とする市道大始良中学校裏線が台地内を東西方向に走り、遺跡地内まで延びている。遺物は、成川式土器、弥生式土器（中期）、縄文式土器（晩期）などの土器破片が顕著で広範囲に見られ、特に台地先端部寄りの畑地は、成川式土器破片が著しく、イモ穴周辺には、縄文式土器の大小破片が見られ、貯蔵用イモ穴を掘った時のものと考えられる。

⑩ 田淵上遺跡

鹿屋市田淵町田淵上にあり、標高約52mの台地縁辺部寄りの畑地に位置する。同台地の西側は、県道田淵一田崎線が南北に走り、田淵町公民館が沿線にある。北側沿いには、県道を基点とする市道大始良中学校裏線が東西方向に走り、その周辺は集落となっている。南側眼下には、県道小浜一高山線が台地寄りを走り、さらに狭長な水田地帯となり大始良川が東西方向に流れ、その比高差は約27mである。遺跡地は、暮小迫遺跡と同一台地で西側端部の台地上の畑地に当り、北東側約100mの所には、大始良中学校が所在している。遺物は、少量であるが成川式土器、縄文式土器（晩期）が見られる。

⑪ 茶園ノ上遺跡

鹿屋市大始良町茶園ノ上にあり、標高約61mの台地縁辺部寄りの畑地に位置する。同台地の南側眼下は、県道小浜一高山線が東西方向に台地沿いを走り、沿線には瀬筒方面まで細長く水田が延び、その比高差は約20mである。北側から東側にかけては、浸食谷となり水田が立地している。南側約300mの所に永崎原遺跡がある。遺物は、成川式土器、縄文式土器（黒色

研磨土器)などの土器破片が見られ、特に遺物は少量であるがイモ穴周辺より縄文時代晩期の土器破片が認められる。

⑫ 藤崎原遺跡

鹿屋市大始良町藤崎原，牧にあり，標高約60～68mの台地縁辺部寄りの畑地に位置する。茶園ノ上遺跡の所在する畑地と同一台地上で東側の畑地にあたる。同台地の北西側には，ため池があり，遺跡地の南側眼下を東西に走る県道小浜一高山線沿いに立地する水田への水源となっている。遺跡地の西側沿いは，県道を基点とする市道瀬筒牧線が南北方向に走り，その沿線に瀬筒墓が所在している。同遺跡は県道寄りの台地縁辺部の畑地を中心に広範囲に遺物散布が見られ，イモ穴周辺には縄文式土器破片が認められる。遺物散布の見られた土地所有者によると「今でも，貯蔵用のイモ穴を作る際に土器破片，石斧類など遺物が見られる」とのことである。

⑬ 瀬筒原遺跡

鹿屋市大始良町瀬筒原，下吹切にあり，標高約60mの台地上の畑地に位置する。同遺跡の南側沿いは，県道小浜一高山線が東西方向に走り，西側沿いは，県道を基点として市道瀬筒線がほぼ南北方向に瀬筒の集落へと延びている。西側は傾斜のある畑地を隔てて県道永吉一高須線がほぼ南北方向に走り，北側から東側にかけては瀬筒の集落地となっている。遺物は，土師器，成川式土器，弥生式土器（中期）の破片の散布が認められ，成川式土器破片は多く見られる。

⑭ 小永崎遺跡

鹿屋市大始良町小永崎にあり，標高約60mの舌状台地上の民家周辺の畑地に位置する。同台地は，北側及び南側に浸食谷が入り込み，三方を水田に取り囲まれた地形となり，北側眼下は県道小浜一高山線がほぼ東西方向に走り瀬筒の集落となっている。遺跡地の西側及び南側沿いには，県道を基点とする市道瀬筒一永吉線と市道小長崎線とが走っている。北東側の約300mの所に藤崎原遺跡，北西側の約300mの所に瀬筒原遺跡が，それぞれ所在している。遺物は白磁，土師器，成川式土器，弥生式土器，縄文式土器などの土器破片が見られる。

⑮ 永崎原遺跡

鹿屋市大始良町永崎原，小永崎原にあり，標高約60mの舌状台地上の畑地に位置する。同台地は，市道西牟田永吉線，市道田淵永吉線，市道大始良久保後線とに取り囲まれた地形で，市道沿線沿いには水田が立地し中央部を小川が大始良川へ流れ込み，その比高差は約23mである。同遺跡の周辺には，小永崎原遺跡，藤崎原遺跡，茶園ノ上遺跡，諏訪尾遺跡などが所在している。遺物は青磁，成川式土器，弥生式土器などの土器破片が台地全体に見られ，特

にイモ穴周辺及び一部畑地においては顕著に認められ、遺物包含層への影響が考えられる。

⑩ 山神遺跡

鹿屋市大始良町山神にあり、標高約65mの山麓の緩傾斜をなす松木林を含む周辺畑地に位置する。同遺跡の北側眼下は、市道田淵永吉線沿線から延びる水田が山麓へと続き、水田地帯を平岡川が流れている。南側は横尾岳（426.3m）へ延びる山麓地帯となり、東側は川東の集落で約100mの所に本村原遺跡（遺跡地区番号12-6）がある。遺跡地は市道獅子目宮下線から延びる農道で二分され、その農道沿いの崖崩れの断面に土器破片が認められ、はっきりと遺物包含層が確認された。遺物は、縄文式土器（後期）などの口縁部、底部が見られる。

⑪ 諏訪尾遺跡

鹿屋市大始良町諏訪尾にあり、標高約50mの舌状台地上の畑地に位置する。同台地は市道大始良久保後線、城内線、田淵永吉線とに取り囲まれた地形を呈し、台地南西端には八幡神社がある。同遺跡地の約200m北側には永崎原遺跡があり、水田を隔てて東側約400mの台地上に史跡大始良城跡が所在している。遺物は、成川式土器、縄文式土器（晩期）の破片が少量であるが見られる。

⑫ 下西原遺跡

鹿屋市浜田町下西原、茶園ヶ尾、国司平にあり、標高約40mの台地縁辺部寄りの畑地に位置する。同台地の北側は上浜田の集落へと続き、西側眼下は鹿児島湾を臨み、国道269号線が浜田海岸とほぼ平行に走り、沿線は浜田の集落地である。南側眼下約500mの所には浜田小学校が所在し、さらに鹿屋市の穀倉地帯の一つ浜田町の水田地帯である。同遺跡は、広範囲に遺物の散布が見られ、特に台地縁辺部寄りの畑地には顕著に認められる。市道下浜田西線が同台地内をほぼ南北に縦断している周辺沿いの畑地のイモ穴周辺には、大きい土器破片が多く見られる。遺物は、青磁、成川式土器、弥生式土器などの破片である。

⑬ 掛平遺跡

鹿屋市浜田町掛平、榎木原にあり、標高約40mの台地縁辺部寄りの畑地に位置する。同台地の西側眼下は、鹿児島湾を臨み高須海岸と平行して国道269号線が走り、その沿線は高須の集落の一部となっている。北側及び北西側には、国鉄古江線が走り、市立高須小・中学校が所在し、高須町の中心街となっている。同遺跡地の東側沿いは、県道永吉一高須線がほぼ東西に走っている。遺物は、台地縁辺部寄りの畑地に集中的に散布し、青磁、成川式土器、弥生式土器（中期）などの土器破片が多量に見られる。

⑳ 湯穴ノ上遺跡

鹿屋市名貫町湯穴ノ上にあり、標高約35mの台地縁辺部の畑地に位置する。同台地の北側及び北西側は、浸食谷が走り水田となり名貫水源地や養魚場が所在している。東側は市道名貫川西線が南北に走り、南側は浸食谷となり水田が立地し、名貫川が流れ、市道名貫中央線が台地沿いに走っている。同遺跡は市道名貫東線、名貫西線、名貫中央線とに取り囲まれた台地上の畑地である。遺物は、成川式土器、弥生式土器（中期）などの破片で、特にイモ穴周辺より大きい破片が見られる。

㉑ 笹ヶ尾遺跡

鹿屋市名貫町笹ヶ尾にあり、標高約35～37mの台地縁辺部寄りの畑地に位置する。同台地の東側沿いは、主要地方道鹿屋一吾平一大泊線を基点とする市道名貫川西線が走り、沿線には集落が見られ、さらに鹿屋内陸工業団地と続いている。南側は、浸食谷を隔てて約200mの所に湯穴ノ上遺跡がある。遺物は、弥生式土器（中期）の口縁部、胴部、底部と大きい破片が認められる。

㉒ 東田ノ上遺跡

鹿屋市川西町東田ノ上にあり、標高約27～28mの台地縁辺部寄りの畑地に位置する。同台地の南側付近は、肝属川が東方へ流れ、肝属川の支流である大始良川及び始良川が流れ込み、沿岸は水田地帯となり、吾平町との行政区画区域となっている。東側沿いは、市道寿光同寺線がほぼ縦断している。同遺跡地内には、三角点があり標高28.2mを数える。遺物は、成川式土器、弥生式土器（中期）が顕著に見られ、一部遺物包含層への影響も考えられる。

㉓ 早馬原遺跡

鹿屋市川東町早馬原、墓ノ西にあり、標高約32～34mの台地縁辺部寄りの畑地に位置する。同台地の東側は、浸食谷が北西方向へ走り水田地帯となり、水田の中央部を流れる光同寺川が高山町との行政区画区域となっている。遺跡地の中央部は市道寿光同寺線により分断され、周辺地域は光同寺の集落となる。西側約500mの所には東田ノ上遺跡が所在する。遺物は、少量であるが青磁、成川式土器、弥生式土器などの散布が見られる。

㉔ 中牧遺跡

鹿屋市川西町中牧にあり、標高約34mの台地縁辺部寄りの畑地に位置する。遺跡地は、鹿屋内陸工業団地南側沿いの畑地で、市道名貫川西線と市道下掘永野田線に囲まれている。同台地の南側眼下は、水田地帯となり大始良川の支流である名貫川が流れている。西側の約400mの所には笹ヶ尾遺跡があり、南西側の約400mの所に湯穴ノ上遺跡がある。遺物は、青磁、弥生式土器（中期）などの破片が見られ、弥生式土器の大きい破片が多く認められる。

②⑤ 王子遺跡

鹿屋市王子町王子にあり、標高約70mの笠野原台地の一角で台地縁辺部寄りの畑地に位置する。同台地の西側眼下は、主要地方道鹿屋一福山線がほぼ南北に走り、肝属川が流れ、周辺地域は水田が立地し、その比高差は約41mである。しかし近年は宅地化が進み住宅用地へと変貌しつつあり、鹿児島県鹿屋合同庁舎及び市立鹿屋中学校が所在し、その周辺地域は住宅地となっている。同遺跡地の北側沿いは、市道小原旭原線が走り、南側沿いは、市道王子火葬場線が東西に走っている。遺跡地内には、王子原小原上線がほぼ南北に走っている。遺物は、弥生式土器（中期）の破片が顕著に見られ、特に台地縁辺部寄りの畑地を中心に大きい破片が広範囲に認められる。

②⑥ 枯木ヶ尾遺跡

鹿屋市古里町枯木ヶ尾にあり、標高約133mの台地縁辺部寄りの畑地に位置する。同遺跡地内を市道近在古里線が南北に走り、市立花岡中学校西側で国道220号線と合流している。同台地の西側眼下は、鹿児島湾を臨み、急傾斜面を国道220号線が蛇行しながら古江町の中心外へと走り、市立古江中学校が所在している。北東側は、市道近在古里線を基点に市道海道西線があり市道白水近在線とを結んでいる。東側は市道白水近在線の沿線沿いに海道町の集落地があり、さらに沿線東沿いには俣刈遺跡がある。北側は早山遺跡地となっている。遺物は、台地縁辺部寄りの畑地を中心に、須恵器、成川式土器、弥生式土器などの破片が広範囲に確認される。

②⑦ 早山遺跡

鹿屋市花岡町早山、粟迫、早山ノ上にあり、標高約130～140mの台地上の畑地に位置する。同台地の北側は、市道近在宮前線が走り花岡町の住宅地となっている。北東側約100mの所に光華保育園があり、その眼下は湧水地となっており、現在でも水量は多く見られる。東側は国道220号線を基点に市道白水近在線が走っている。遺跡地は広範囲で市道近在宮前線の南側沿いの神社寄りの畑地とは約10mほどの高低差があり、遺物の散布は成川式土器を中心に大小破片が多量に見られる。

②⑧ 俣刈遺跡

鹿屋市海道町俣刈・俣刈迫・上俣刈にあり、標高約150～160mの山麓の微傾斜をもつ畑地に位置する。同遺跡は市道白水近在線東側沿いにあり、南東側は市道沿線に海道町の集落地が所在している。東側は市道近在古里線がほぼ南北に走り、早山遺跡や枯木ヶ尾遺地となり、海道町及び花岡町の畑作地帯である。北西側は市道沿線に花岡町の集落地となっている。遺物は、成川式土器、縄文式土器（前期）などの遺物が広範囲に見られ、特に成川式土器の散布が顕著に認められる。

②⑨ 池ノ迫上遺跡

鹿屋市飯隈町池ノ迫上にあり、標高約35～40mの台地縁辺部寄りの畑地に位置する。同台地の東側から南側眼下にかけては水田地帯となり、その中央部を大始良川が流れており、その比高差は約20～25mである。西側には、西俣小学校があり、一部は学校敷地と相接している。遺跡の南側沿いは、県道小浜一高山線が東西に走っている。北側沿いは、飯隈公民館東隣り畑地付近までとなる。遺物はそれほど多くないが須恵器、成川式土器、弥生式土器などの破片が広範囲に見られる。

③⑩ 鎮守ヶ迫遺跡

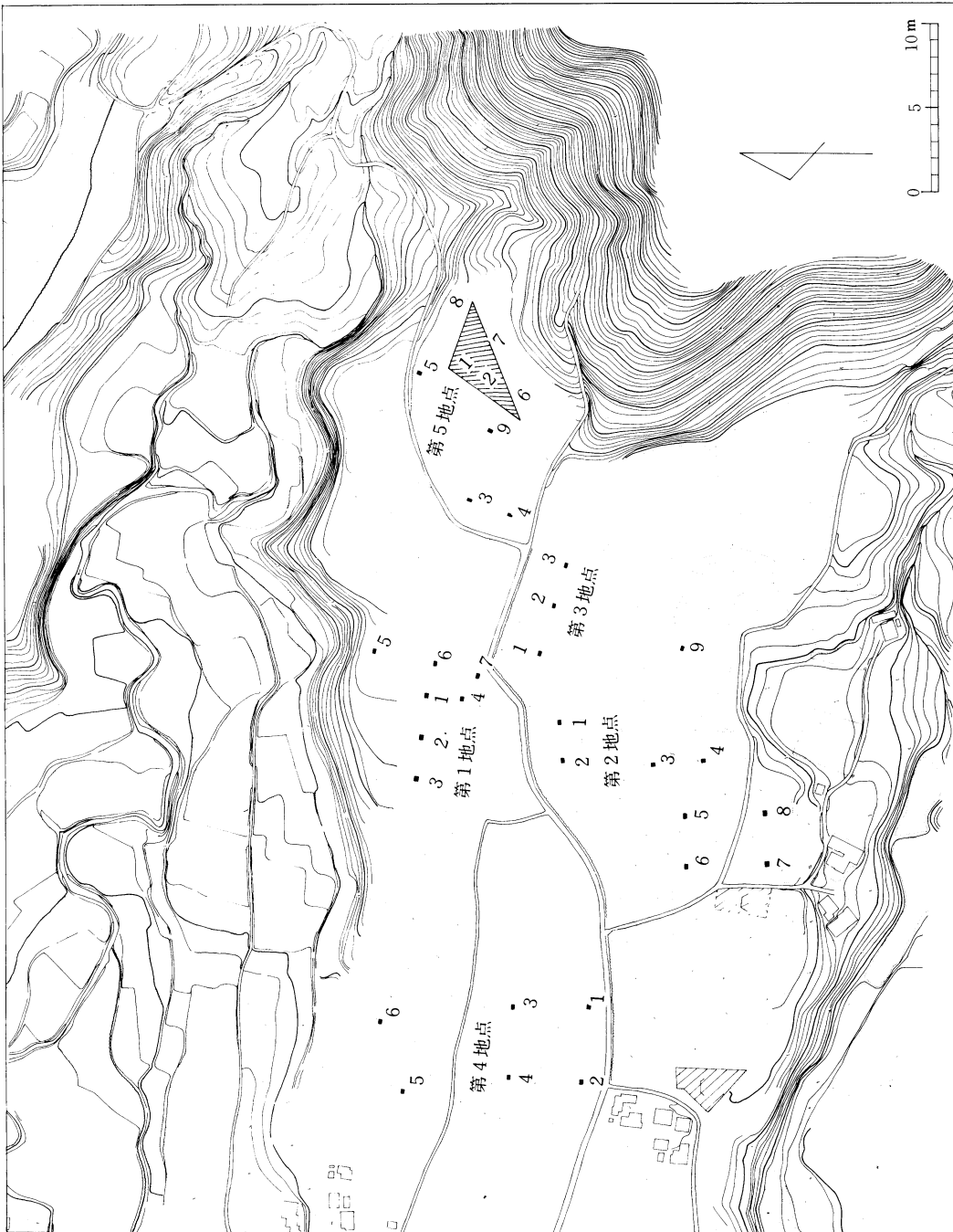
鹿屋市南町鎮守ヶ迫にあり、標高約70mの台地縁辺部の畑地に位置する。同台地北側は山下公民館付近より南方へ延びる畑作地帯となり、中央部を1号関連農道がほぼ南北に走っている。台地の東西両側には、浸食谷が発達し、共に大始良川周辺水田地帯より続く水田が台地を取りまくように存在し、清水川及び獅子目川支流が流れている。南側は山麓となり大根占町との行政区画区域付近の山岳へと続いている。同遺跡地の東西側約200mの所には、牧ノ原遺跡が所在している。

今回、鎮守ヶ迫遺跡の所在する台地で、遺物散布の見られた畑地の耕作に影響のない畑地を中心に、2m×3mを基準に約33ヶ所を任意に設定し調査を実施した。その結果、成川式土器、弥生式土器（後期）、縄文式土器（早期・中期・後期・晩期）が、遺物包含層より確認された。その概略は、次のとおりである。第1地点の1・3・5トレンチ、2地点1トレンチ、第4地点1・4トレンチ、第5地点1・2・5・6・7・8トレンチにおいて上記の土器の出土や遺構の検出がなされた。第5地点は鎮守ヶ迫遺跡の一部地区にあたり、遺物包含層の浅い所も認められたため確認のための発掘調査を実施した。

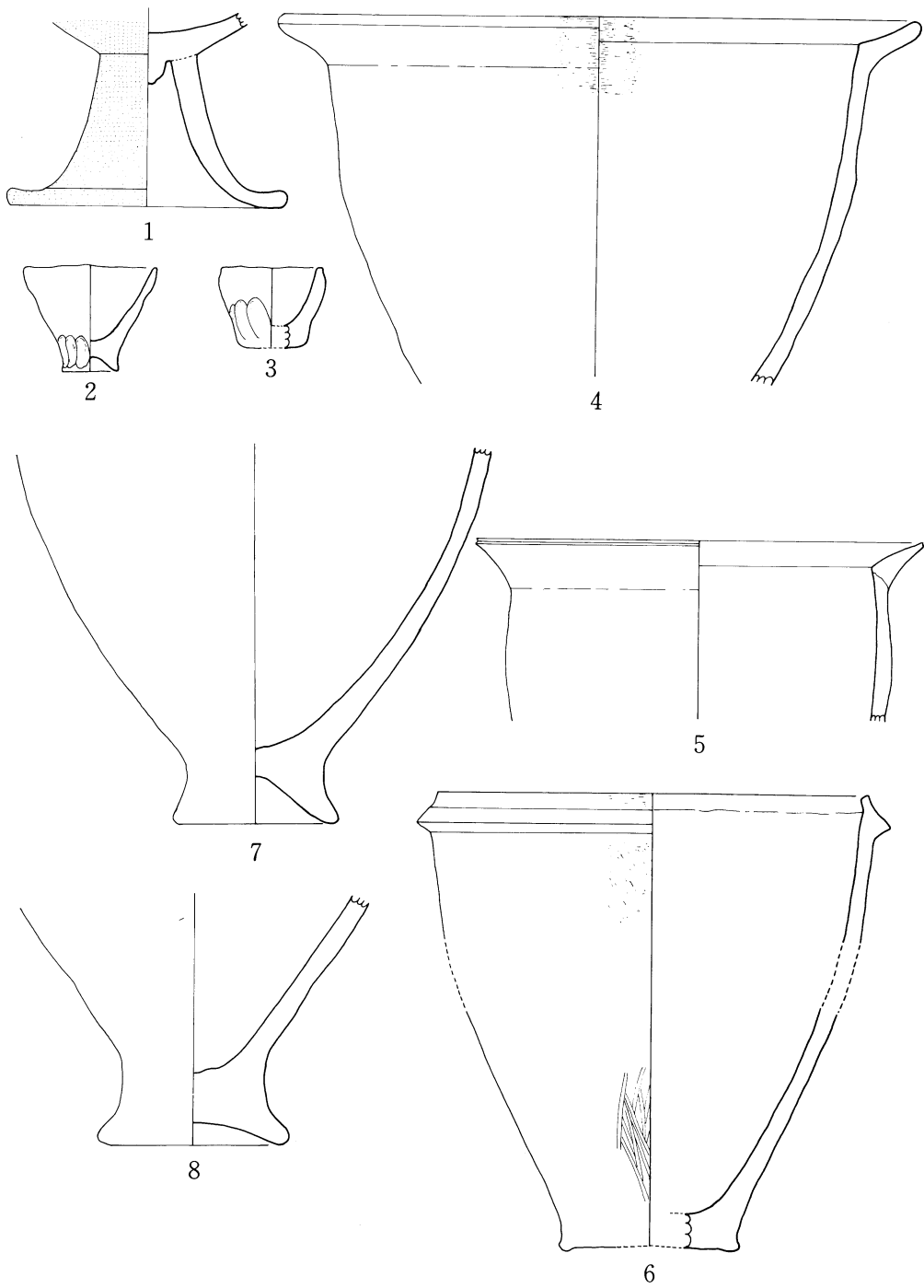
調査を実施した遺跡地は、成川式土器、弥生式土器、縄文式土器など多量の土器や磨製石斧、石ヒ、石庖丁、石器などの遺物の出土が見られ、集石遺構が4ヶ所において検出された。

基本的層序については、第Ⅰ層、灰黒色火山灰土層（耕作土）、第Ⅱ層、黒色火山灰土層（スコリアを含む）、第Ⅲ層、紫色膠結コラでⅣ層最上部にブロック状に認められる。第Ⅳa層、茶褐色火山灰土層（軽石混入）、第Ⅳb層、茶褐色火山灰土層（軽石混入）Ⅳa層に比して軽石の量が多くなる。第Ⅴ層、黄白色軽石層、第Ⅵ層、赤褐色火山灰土層、第Ⅶ層、乳褐色火山灰土層（粘質が強い）、第Ⅷ層、黒褐色火山灰土層（硬質）となっている。遺物包含層は、第Ⅳa層と第Ⅶ層であり、第Ⅳa層は上部に成川式土器、弥生式土器（後期）、中位よりに縄文時代中期、後期の遺物が見られ、第Ⅶ層は、縄文時代早期・前期の土器が認められる。

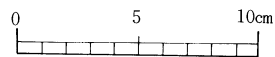
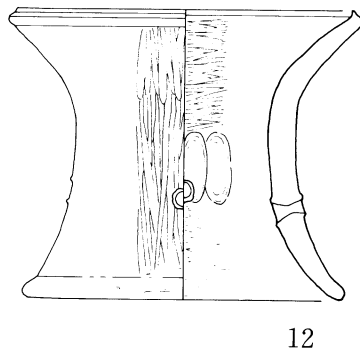
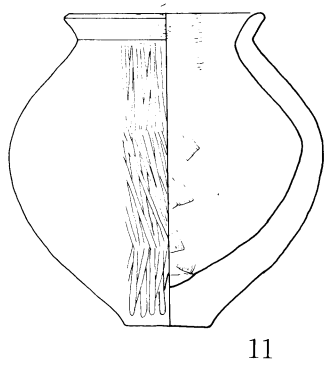
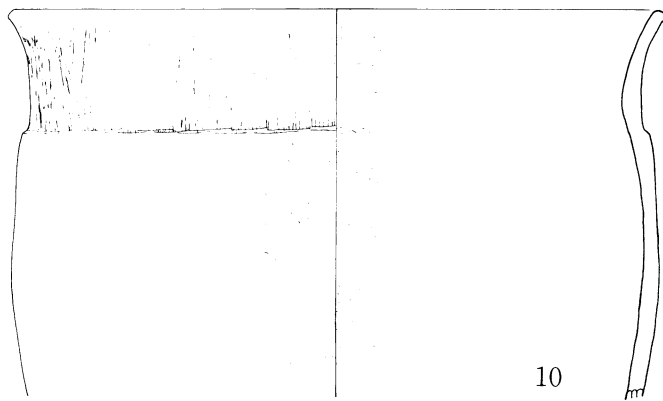
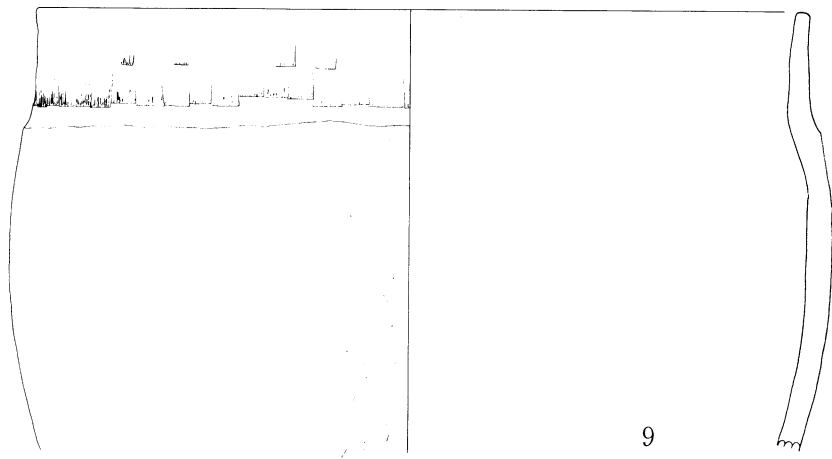
遺物は多量に出土し、遺物の中で特徴的なものを取り上げると、土器（第21・22図）と石器（第23図）が見られる。土器1は、高環で底部径12.5cm、胴部と環部の接合が突起状になって残っている。2・3は手握ね土器である。2は底部付近を指による押圧調整痕が認めら



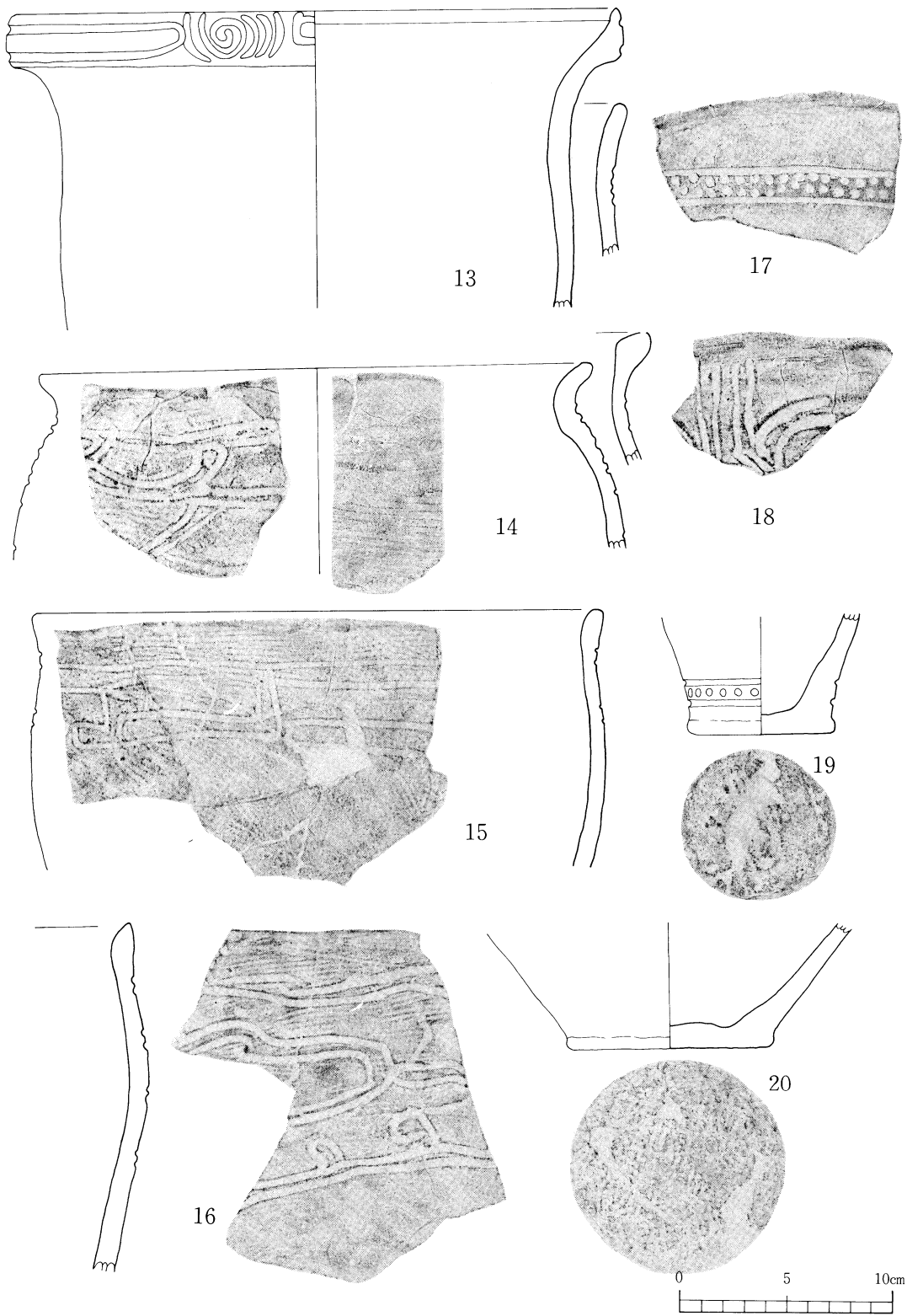
第19図 鹿屋市鎮守ヶ迫地形図及トレンチ



第20図 鎮守ヶ迫遺跡土器実測図

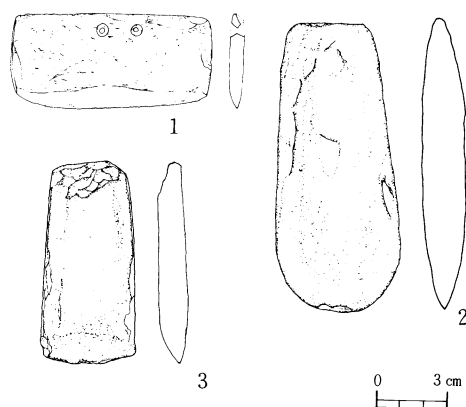


第21図 鎮守ヶ迫遺跡土器実測図



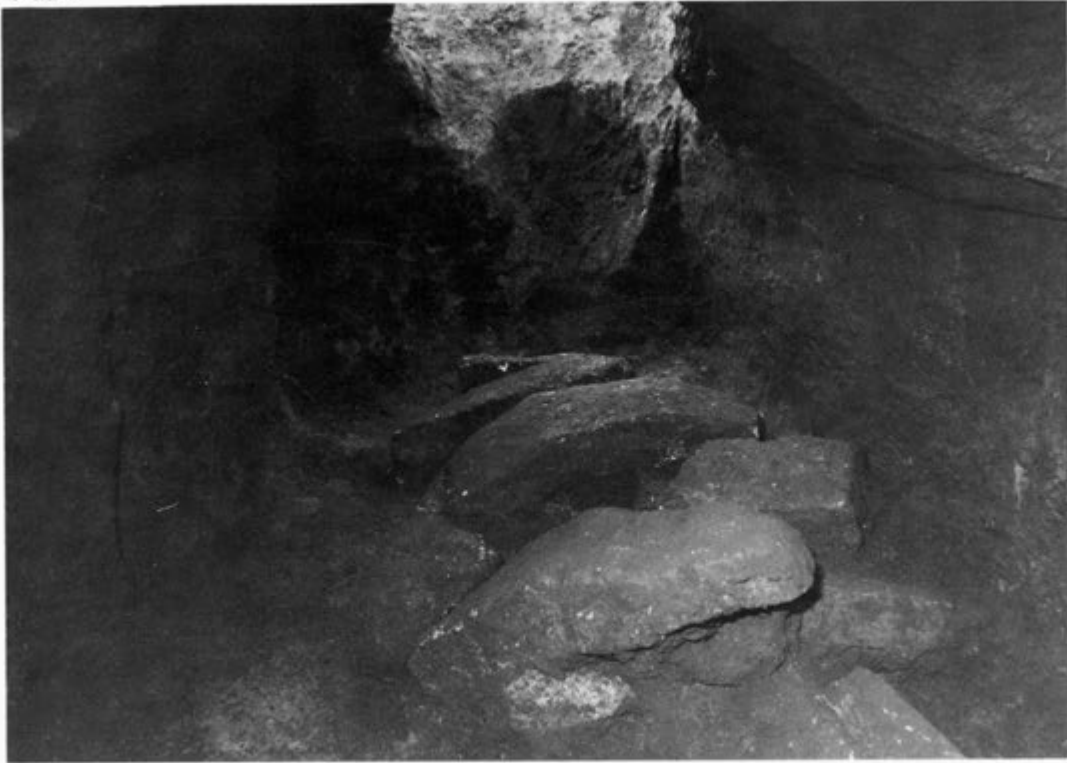
第22図 鎮守ヶ迫遺跡土器実測図及拓影

れる。**3**は底部近くに押圧調整痕が認められる。**4~10**は甕である。**4**は口縁径29cm,「く」の字状に外反する口縁部から胴部はやや張って底部へとすぼまってゆく。**5**は口縁径20cm,「く」字状に外反する口縁部は鋭くすぼみながら口唇部は小さくくびれを有し,胴部はやや張っている。**6**は甕というより鉢と呼称したほうが妥当かも知れないが,内湾する口縁部の直下に断面三角形の突帯を貼りつける。口縁径19.4cm,復元器高20.2cm,底部は8.2cmの平底である。胎土は緻密で,焼成は良好で,調整は口縁部より胴部にかけてはハケ調整が施され,胴部下位より底部にかけては細かいヘラ調整が認められる。**7・8**は甕の底部である。**7**は底部径7.5cmであげ底である。**8**は底部径8.6cmで浅いあげ底である。**9**は復元口縁径32cm,やや張った胴部であり,頸部においては段を有し,直行に近い口縁部へと移行する。胴部はハケ調整が施され頸部くびれ部のやや上位より口縁部にかけては,ハケのかき揚げが明瞭に認められる。**10**は復元口径27cm,やや張った胴部より頸部において段をなし,外反する口縁部へと移行する。整形は内外面ともにハケ調整痕が認められ,頸部のくびれ部より口縁部へハケのかき揚げ技法が見られる。**11**は小型の壺で口縁径8.3cm,器高12.9cmを測る。頸部は,張った胴部より小さな平底へと移行する。器面調整は全面ヘラけずりである。**12**は器台形土器で上下に開く筒形で円孔を4ヶ所にあけてある。口縁径14.6cm,高さ12cmを測る。器面はヘラけずりで,口縁部を有する。**13**は復元口縁径29.2cmで断面三角形に肥行する口縁部を有し,口縁部にヘラ描きの沈線文が施されている。**14**は復元口縁径26.4cm,口縁部はくびれており,胴部に平行沈線文が施される。**15**は復元口縁径27.4cmで,胴部上位に平行沈線文(長靴文)の施文が見られる。**16**はやや肥厚する口縁部を有し,胴部に平行沈線文が見られる。**17**は胴部上位に2条の沈線をめぐらし,沈線間に2列の連続刺突文を施す。**18**はやや肥厚する口縁部を有し,沈線文が施されている。**19・20**は底部である。**19**は底部近くに2条の沈線をめぐらし,2条の沈線間に連続刺突文が施され,網代底を呈している。**20**は底部径9.8cmで,網代底となっている。以上は鎮守ヶ迫遺跡より出土した土器の一部であるが,**1**は成川式土器に伴なうものと思われる。**2~12**は弥生時代に比定できよう。**13~20**は縄文時代後期に比定され,**14~18**は指宿式土器と思われる。石器は,石庖丁,磨製石斧,石



第23図 鎮守ヶ迫遺跡石器実測図

匕,叩き石,磨石などの出土が見られる。第23図**1**は完形の石庖丁で,第Ⅲa層の出土である。全長8.7cm,最大幅4.1cm,最大厚0.6cm重さ40g,穴は上部径0.45cm,下部径0.25cmを測る。穴の幅は同一で,穿孔は両面からである。研磨痕が全体に認められる。第23図**2・3**は磨製石斧で,第Ⅲa層の出土である。**2**は全長12.3cm,最大幅5.3cm,最大厚1.8cm重さ200gを測る。**3**は全長8.7cm,最大幅4.1cm,最大厚1.3cmを測る。



①上ノ原地下式横穴・玄室(羨道側より)



②上ノ原地下式横穴・玄室(玄室奥壁より)



塚崎(西原)遺跡出土遺物



①天神原地下式横穴・堅穴及羨道部閉塞状態



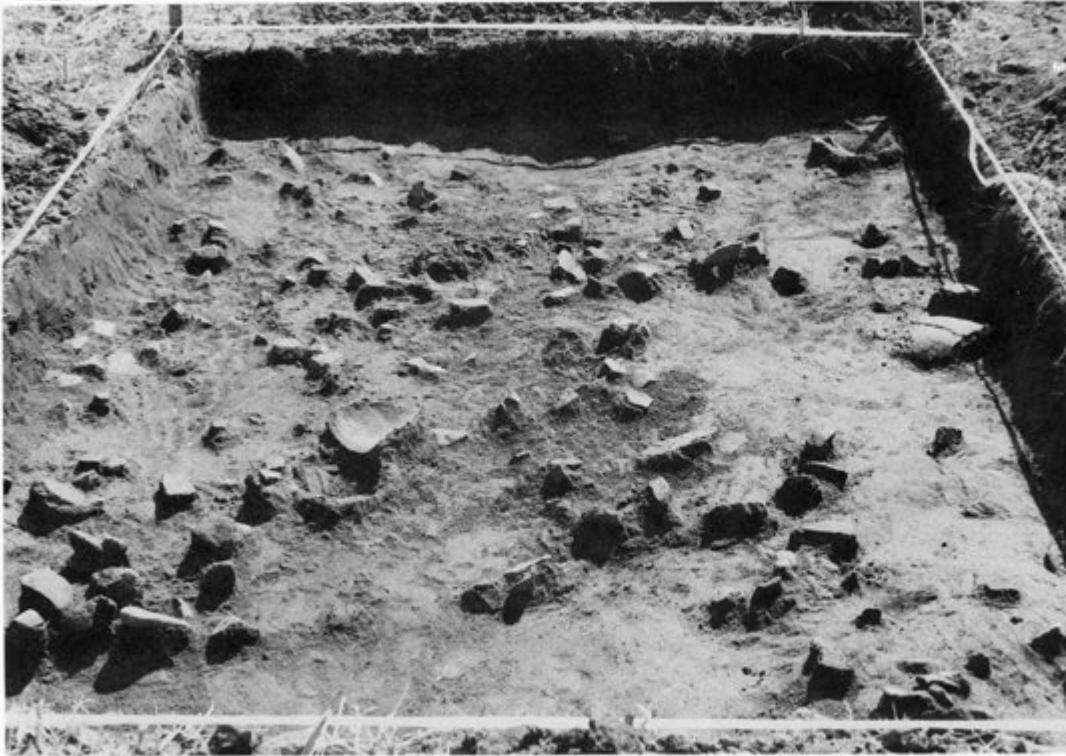
②天神原地下式横穴・玄室(羨道側より)



①原田地下式横穴玄室及軽石石棺(蓋をとった状態)



②原田地下式横穴軽石石棺底部



①末吉町宮ノ迫遺跡・7-2トレンチ土器出土状態

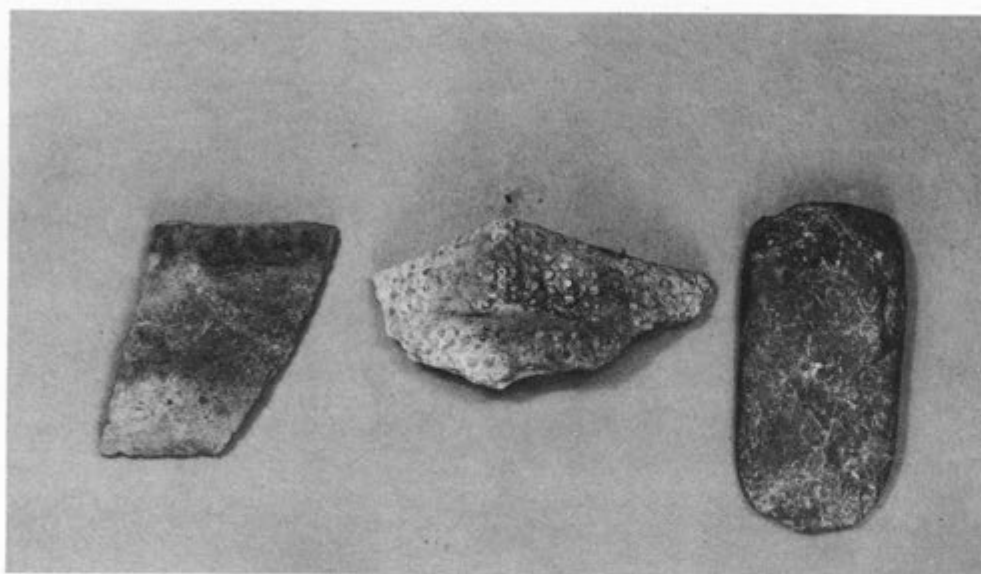


②出土土器3

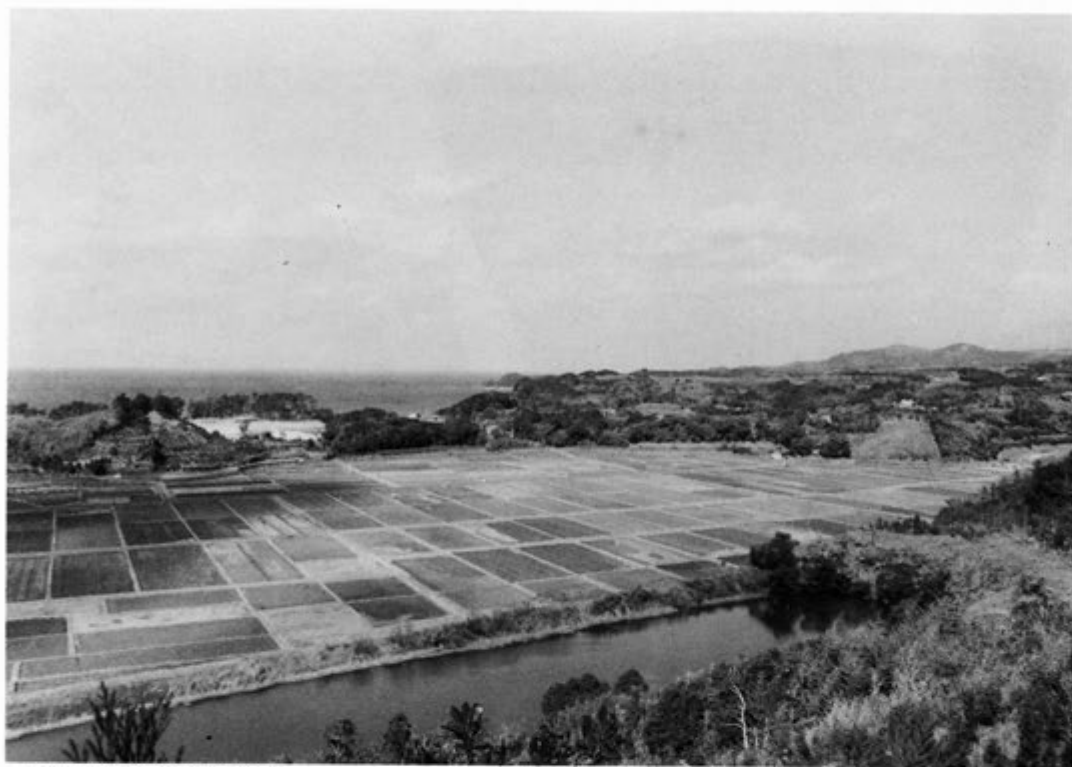


③出土土器2

図版6



① 鹿屋市本坊遺跡採集遺物

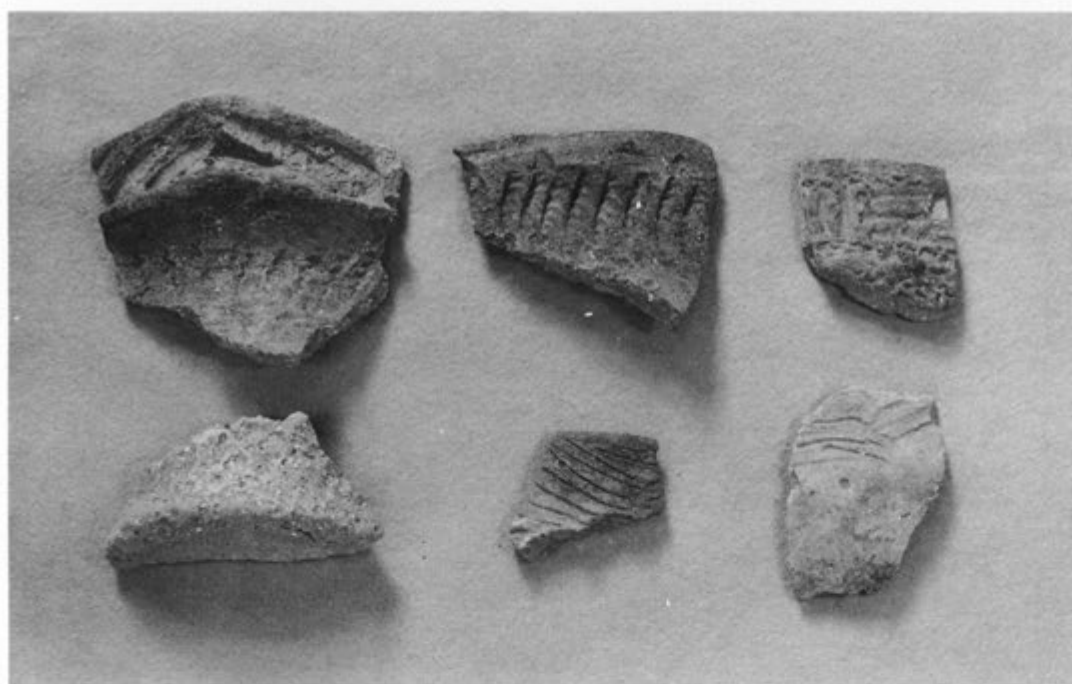


② 鹿屋市下西原遺跡遠景

図版7



① 鹿屋市山神遺跡近景



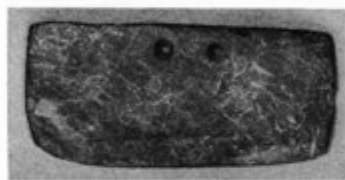
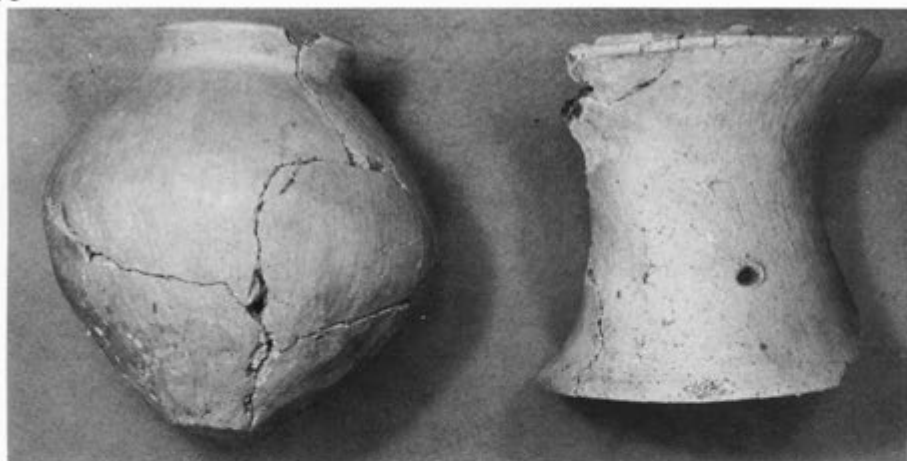
② 鹿屋市山神遺跡採集遺物



① 鹿屋市鎮守ヶ迫遺跡集石検出状態



② 鹿屋市鎮守ヶ迫遺跡土器出土状態



石庵丁

鎮守ヶ迫遺跡出土遺物

鹿兒島県埋蔵文化財調査報告書 (13)

大隅地区埋蔵文化財分布調査概報

発行日 昭和55年 3月20日

発行 鹿兒島県教育委員会 〒892 鹿兒島市山下町14番50号

印刷 日進印刷株式会社